慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	高崗事件再考
Sub Title	The Gao Gang affair revisited
Author	高橋, 伸夫(Takahashi, Nobuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2018
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.91, No.11 (2018. 11) ,p.1- 54
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20181128-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高崗事件再考

高橋伸夫

はじめに
Ⅰ　事件の経緯
（1）北京における高崗の活動の始まり
（2）全国財経会議（一九五三年夏）前後
（3）党中央第二回全国組織会議（一九五三年秋）前後
（4）一九五三年末における事態の急展開
（5）第七期四中全会（一九五四年二月）とその後
Ⅱ　高崗粛清に関する従来の諸説の検討と新たな仮説の提示
おわりに

はじめに

高崗事件とは、一九五四年春、中国東北地方の実力者として知られる高崗が、中国共産党（以下、煩雑さを避

けるために、共産党、あるいはたんに党と略記する場合がある）中央組織部長の饒漱石とともに粛清された事件を指す。彼は当時、中共中央政治局員、中央人民政府副主席、国家計画委員会主席、東北行政委員会主席を務めており、紛れもなく当時の中国の最高指導者のひとりであった。彼の粛清は、中華人民共和国建国後、初の最高指導者の粛清となった。

一九〇五年に陝西省の貧農の家庭に生まれた高崗は、一九三〇年代前半に西北根拠地を築き、長征に疲れ果てた紅軍を迎え入れた。戦後の国共内戦時期においては、彼は東北に活動の舞台を移し、中央東北局第一書記、東北人民政府主席、東北軍区司令員兼政治委員を歴任し、東北地方の党、政府、軍を一手に掌握した。また、一九四八年にソ連・東北人民政府貿易協定を結ぶなどソ連との独自の関係を作り上げたことでも知られている。さらに、朝鮮戦争に中国が派遣した「人民志願軍」を後方で支えたのも彼であった。

毛沢東はこのような高崗の政治的手腕を高く評価し、一九五二年晩秋に彼を北京に異動させ、国家計画委員会主席に任命した。加えて、中央政府のいくつもの省庁の最高責任者を任せた。ところがその後、中国共産党の正統的文献によれば、高崗は饒漱石と秘かに結託して一九五三年後半に党と国家の権力を簒奪する目的で一連の「反党分裂活動」を行ったのであった。この陰謀は一九五四年二月の中国共産党第七期四中全会（以下、煩雑さを避けるため、第七期四中全会と略記する）で暴露され、次いで、一九五五年三月下旬、北京で開催された党全国代表者会議において「高崗・饒漱石反党連盟に関する決議」が採択された。同決議の述べるところ、高崗は「一九四九年以来、……党と国家の指導権力を奪い取ることを目的に陰謀活動を行った。……一九五三年に中央の工作に異動させられて以降、彼の反党活動はさらに猖獗をきわめた。……饒漱石は高崗の反党陰謀活動の主要な同盟者であり、……毛沢東をはじめとする長く経験を積んだ党中央の指導の核心を転覆し、もって党と国家の指導権力を奪い取ろうと目論んだ」のであった。(1)

毛沢東は、「陰謀」が発覚した二年後に当時を振り返って、高崗をもう一年のさばらせておくのは、想像もできない恐るべきことであったと述べた。[2] さらに、四年後には、「高崗・饒漱石事件は震度八の地震であった」と語っている。[3] したがって、中国共産党に疑いもなく大きな衝撃を与えた事件であった。

とはいえ、高崗が具体的にいかなる「反党分裂活動」を行ったのかは、必ずしも明らかではない。はたして「震度八の地震」とは何を意味するのか。そもそも、毛沢東によってそれほど高く評価されていた人物が、なぜ短期間のうちに忌まわしい「反党連盟」の首魁に変貌を遂げたのであろうか。正統的文献が語る高崗の個人的資質の問題――私生活の堕落や個人的野心や文化的水準の低さ――は、彼の急転直下の転落を十分に説明するものとはいいがたい。この東北の実力者は、実際のところ何をしたというのであろうか。毛沢東のほうが彼に罠を仕掛けたのではなかったか。このような疑問が自然に浮かぶがゆえに、高崗の粛清の理由をめぐって、当時から一九八〇年代にかけて、中国共産党の正統的見解とは異なるいくつかの仮説が提起された。だが、それらもまた十分な証拠によって裏付けられたものではなかった。以降、この事件は数十年にわたって真剣な考察の対象とはならなかった。それはひとえに、この事件の再考を促すだけの資料の不足によるものである。

だが、二〇〇〇年代以降、この事件に関する資料状況は大きく変化した。[4] われわれはいまや、この事件にかかわった重要な指導者たちの年譜、伝記、回想録を参照することができる。当時、中国の指導者たちと会見した駐華ソ連大使による記録も利用可能である。戴茂林・趙暁光『高崗伝』（二〇一一年）、高崗の秘書を務めた趙家梁の回顧を交えた『高崗在北京』（二〇〇八年）など、注目すべき新たな伝記も出版された。さらには、事件に関する最も包括的な研究書というべき林蘊暉『重考高崗、饒漱石「反党」事件』（二〇一七年）が出版された。この小論は、これらの比較的新しい資料と文献に基づき、この事件に関する現在までの理解の到達点を確認すると同時に従来の仮説の妥当性を吟味し、高崗が粛清されるに至った理由、およびこの事件の歴史的な意味を再検討しよ

うと試みるものである。

本稿の構成は以下の通りである。まず事件の経緯を新しい資料に基づき、従来の文献では知られていなかった諸点を盛り込みながら整理する。これによって、東北の実力者の粛清の物語に重要な細部が付け加えられるとともに、不可解な諸点もまた浮かび上がるであろう。次に、より詳細となった事件の経緯に照らして、従来の諸説を再検討する。そのうえで、筆者は新たな仮説を提示しようと思う。この仮説は、なおも十分に証明しうるものではないが、それでも従来の文献と比べれば、現代中国史において重要なこの事件の真相に一歩近づいたものと信じる。

Ⅰ　事件の経緯

（1）北京における高崗の活動の始まり

この事件の物語を、一九五二年秋に党中央が高崗を東北から引き離し、北京で仕事をさせることを決定したところから始めてもよいであろう。同年一一月党中央は、高崗を新たに設立されたばかりの国家計画委員会主席に任命した。趙家梁によれば、このとき高崗は彼が東北地方であげた輝かしい成果と、劉少奇に対する不満を携えて北京にやって来たのであった。(5) 劉少奇との関係については、すぐ後に立ち返ろうと思う。

同年冬から一九五三年前半にかけて、高崗はほぼ毎日午後、党機関が集まる中南海に出かけ、毛沢東が主宰する党中央の小規模な会議に参加し、ソ連の経済建設の経験、およびソ連共産党第一九回大会の文献を研究していたという。国家計画委員会に加え、同年五月一五日以降は重工業部、第一機械工業部、第二機械工業部、燃料工業部など全部で八つの中央政府の部長（現在の日本でいえば大臣に相当する）となったことから、彼は多忙を極め

ていた。[6] 当時、高崗のオフィスは中南海新西楼（一号楼）の一階にあり、それは毛沢東のオフィスと向かい合っていたために、彼は毛と比較的多く会話する機会があったようである。[7] この頃、毛沢東は高崗の理論と現実を結び付ける手際のよさ、また英米の動向にもつねに注意を払っている様子を称賛したのであった。[8]

趙家梁の興味深い記述によれば、一九五三年前半において、党内の機密文献を閲覧する順番は、一般に、毛沢東、劉少奇、周恩来、朱徳、高崗、彭徳懐、彭真……となっていた。ところが、ある時期、周恩来がその順番を入れ替え、毛、高、劉……としたという。高崗はこれに気が付くと、即座に周恩来に電話をかけ、このような順序の転倒を行わないよう求めたという。[9] これは周恩来が、毛沢東の高崗に対する高い評価を感じ取ったためか、それとも高の野心を探るために、彼の反応をみようとしたのか、真相は不明だと趙は述べる。だが、毛沢東の高崗に対する信頼は本物であった。同年半ば、主席は高崗に対し、劉少奇が一九二〇年代に奉天で逮捕される前後の劉のファイルを調べるよう秘密裏に命じたのであった。[10]

一九五三年四月、中央組織部副部長の安子文によって、来るべき中国共産党第八回全国代表大会で政治局員となるべき人々の名簿が作成された。高崗はこの名簿を、毛沢東の機密文書担当秘書から送られてきた文献のなかに見出したという。そして、この名簿に薄一波の名があったが、林彪の名がないこと（「有薄無林」）に驚き、この名簿作成の背後には劉少奇の意思が働いている（実際に、安子文は劉少奇の古い部下の一人であった）と思い込み、この見方を陳雲、林彪、黄克誠（人民解放軍副総参謀長）らに話したという。この名簿の存在を知った毛沢東は、それを勝手に作成したかどで安子文を叱責し、自己批判させたうえ、この名簿を拡散させてはならないと釘を刺した。[11] だが、高崗は後述する全国財経会議および南方旅行の最中に、この名簿の存在を地方幹部と軍の指導者に告げ、それを使って劉少奇を攻撃する材料としたという。毛沢東はこうした高崗の言動を一一月、中央軍事委員会拡大会議の際、葉剣英および譚政との会話を通じて知ったという。[12]

とはいえ、高崗の秘書による以上の記述が事実に基づいているとすれば、少なくとも一九五三年夏を迎えるまでは、毛沢東と高崗の間に重大な溝があったとは考えにくい。一方、三月以降、趙家梁の極めて具体的な記述によれば、一部の指導者たちとの関係がこじれていったのであった。とりわけ、中央財経委員会副主任の薄一波との関係が悪化した。というのも、国家計画委員会はしばしば中央財経委員会と協議を行っていたが、その際の薄一波の権威主義的な態度に高崗が立腹していたからであった。[13] だが、高崗の最大の標的は、薄一波の背後にいると思われた劉少奇であった。

高崗は早くから劉少奇に反感を抱いていたわけではなかった。だが、一九四七年頃、東北地方における解放戦争の進め方をめぐって、彼は中央東北局書記の彭真と対立しており、その彭真を劉少奇が庇っていると高の目に映ったことから、彼の劉に対する悪感情が芽生えたという。[14] この悪感情は、中華人民共和国成立前後、高崗が東北地方において個人経営と民族ブルジョアジーの活動を制限しようとしたこと、また互助合作社を大いに発展させようと試みたことを、劉少奇が「急性病」（せっかち病）とみなして問題視したことによって増幅された。さらに、公営企業における雇用主と労働組合（工会）との関係をめぐる論争において、高崗は彼が論敵とみなした中央中南局第三書記の鄧小恢の背後にも劉少奇をみていたのであった。[15] 北京に異動を命じられた際、この東北に深く根を下ろした人物は、首都で仕事をすることに気が進まなかった。彼が党中央に赴く直前にロシア人に語ったところ、劉少奇と彼に近い指導者たち――彭真、薄一波、李立三、李富春など――が高に「高級職位」を与えるが、実際にはさして重要な作用を果たすことがないよう画策していたのであった。[16] 劉少奇に対する反感は、高崗が北京に来て以来、毛沢東と私的な会話を交わすなかで、毛の口から直接、劉少奇の批判を聞くにつれ強められたようである。[17]

（2）全国財経会議（一九五三年夏）前後

一九五三年六月一三日から八月一三日までの長期間にわたり、周恩来が主宰する全国財経会議（以下、財経会議と略す）が開催された。この会議期間中の六月一五日に開催された政治局会議において毛沢東が「過渡期の総路線」を提起し、中国における社会主義改造の狼煙をあげたことはよく知られている。財経会議では薄一波が提起した新税制案が批判の集中砲火を浴びた。その背景には、一九五〇年以降施行されていた「全国税制実施要則」が、国有企業および合作社企業を税制面で大いに優遇していたものが、これらの企業が国民経済のなかで日増しに比重を高めていたため、税収増を目的とした新たな税制が必要とされていたことがある。薄一波らの手による新税制の特徴である「公私一律平等納税」に対して、同年二月、毛沢東は公然と不満を述べた。[18] 中国共産党の正統的文献は、この会議における薄一波に対する批判を、高崗による「批薄射劉」（薄一波を批判して、その背後にいる劉少奇を射るという意味である）の詭計であったとしている。[19] だが、財経会議に参加した中央東北局の指導者で高崗の腹心であった張明遠のメモによれば、同会議中の薄一波に対する黄克誠、李先念、譚震林、および饒漱石の批判は激烈であったが、それに比べて高崗の批判は穏やかなものであった。しかも、高崗の発言原稿は、事前に周恩来、毛沢東、さらには劉少奇の目を通ったもので、すでに主席がいくつもの個所に手を入れたものであった。[20]

同年八月九日、中南海で行われた政治局会議の最中、高崗が立ち上がって薄一波の態度がよくないと批判し始めたところ、毛沢東がこれをさえぎり、お前の態度もよくないと高を批判したという。[21] とはいえ、このエピソードが事実であるとしても、この時すでに毛沢東が高崗の意図について重大な疑念を抱いていたと結論付けるのは慎まなければならない。主席が一九五三年夏に、高の言動を真剣に批判した証拠は見当たらないのである。

同月一〇日および一一日、政治局会議において周恩来による財経会議を締めくくる発言原稿が議論された。毛

沢東はその「過渡期の総路線」に言及した部分について、その方針と政策はすでに一九四九年三月に採択された第七期二中全会の決議に記されていたものであると加筆した。さらに主席は、「薄一波同志を代表とする若干の財政経済工作幹部が、私人が営む資本主義に対して犯した過ちは、直接に上記の規定に違反している」と付け加えた。だが、毛は薄の誤りについて、もともとの原稿にあった「路線の性質を有している」という言葉を削除したうえで、「われわれは彼が謙虚に同志たちの正しい批判を受け止め、断固として自己の誤りを正し、党の指導下で継続して党と人民に有益な工作を行うことを希望している」と締めくくった。(22)

以上の経緯は、われわれを少なくとも次の二つの仮説に導く。第一に、従来の文献において高崗による「詭計」とされていた「批薄射劉」は、趙家梁が強調するように、実際には高崗の企てではなく、毛沢東の企てと演出によるものであったと考えるのが適切であるということである。(23) 第二に、主席は、財経工作会議の始まりの時点において、薄一波を路線上の誤りを犯していると判断し、彼を厳しく批判したものの、同会議の過程で薄に対する批判の行き過ぎがかえって党内の団結を損なうことを憂慮し、誤りの水準を格下げして彼を取り込みにかかったものと考えられる。毛の思惑どおり、この二日後には劉少奇も自己批判を行って、社会主義建設に関する認識が誤っていたことを認めたのであった。(24) かくして毛沢東の「批薄射劉」は、その目的を遂げたのであった。

この直後（日付は不明）、高崗は党中央によってモスクワに派遣され、ベリヤ事件の報告を受けた。ベリヤ事件とは、かつてソ連の治安と警察を統括する内務人民委員部（ＮＫＶＤ）の議長を務め、スターリンの片腕でもあったラヴレンチー・ベリヤが、一九五三年六月に、フルシチョフによって失脚させられた事件を指す。ベリヤはイギリス情報機関と通じた国家反逆罪の容疑で逮捕され、同年一二月に処刑された。(25) 高崗がモスクワに派遣された際、彼の秘書である趙家梁は随行を許されず、代わりに毛沢東の秘書である葉子龍およびロシア語通訳の師哲が同行した。(26)

趙家梁が語るところ、全国財経会議の終了後、毛沢東は高崗および張明遠と会って同会議について話す機会があった。[27] 趙によって再現された張の話によれば、毛はその際、次のように述べたという。「現在、北京には二つの司令部があるという者がいる。譚震林〔当時、中央華東局第三書記〕は私にこう話した。中央は毛主席に反対する者がいることに警戒しなければならない、現在、北京には二つの司令部があり、党権、政権、財権はすべて白区〔国民党支配地域〕の党の手中にあり、私の手中にはないという。白区の党が権力を奪う危険性があるというのだ。私は譚震林を批判した。そのような言い方は誤りだ！　党内では異なる意見を提起してもよい。しかし、団結に注意しなければならない。『白区党』や『ソビエト区党』なるものは存在しないし、二つの司令部も存在しない。われわれにはひとつの党、すなわち中国共産党しかない。またひとつの司令部しかない。それは私を司令官とする司令部だ」。そう述べた後、毛沢東は「君たちはこの問題をどうみる」と尋ねた。高崗は「ありえないでしょう」と答え、張明遠は黙っていた。趙家梁のみるところ、この主席の発言は、「口の軽い」高崗がこの後どう出るか、彼の態度を試すとともに、彼の背後にいて彼とつながっているかもしれなかった軍の高級幹部の態度を知ろうとした可能性があるのであった。果たせるかな、高崗は毛の話に非常に興奮し、主席と別れた後、陳雲の家へ飛んで行って彼にこの話を伝えたという。趙によれば、後に高崗が自己批判した際、彼はこう述べたのであった。「私はこの話〔上記の毛沢東の高崗と張明遠に対する話を指す――高橋〕を聞いて、毛主席が内心では譚震林の言うことに賛成しているのだと思った。私もこの観点に賛成した。このことは、その後、いくらかの人々に言いふらした」。[28] このようにして、財経会議後、高崗は劉少奇が最も危険な人物であるとの確信を深め――まさに「白区党」を代表する人物と目されたから――同会議が彼に対する攻撃をあっさりと打ち切ってしまったことに満足せず、おそらくは毛沢東のためにと考えて、劉少奇を追撃しようとしたのであった。[29]

高崗は、全国財経会議後に党中央が考え始めていた党と国家の指導機関の再編成のなかで、劉少奇を実質的に

無力化させることを目論んだかもしれない。当時、党中央は国家の最高行政機関を「部長会議」という形式にし、また党中央に副主席を増設するか、あるいは総書記のポストを設けることを検討していたのであった。[30]『林彪伝』の作者によれば、高崗はこの機会に乗じて人事上の画策を試み、まず林彪に手紙を書いて、林が部長会議の主席になるのはどうかと提案したが、彼はこの手紙を破り捨ててしまったという。[31]

（3）党中央第二回全国組織会議（一九五三年秋）前後

一九五三年九月一六日から一〇月二七日にかけて、北京で党中央第二回全国組織工作会議（以下、中央組織会議と略す）が開催された。高崗は出席しなかった。[32] しかし、彼に批判的な文献は、彼の「代理人」である中央東北局副書記の張秀山、中央東北局組織部長の郭峰、および饒漱石が、中央組織部副部長の安子文を執拗に攻撃し――これは安の背後にいるとみられた劉少奇に対する攻撃でもあったという――会議を混乱に陥れたとしている。[33] だが、趙家梁が断言するところ、高崗は張秀山の発言原稿にも郭峰のそれにも事前に目を通しておらず、饒漱石の発言内容もまったく知らなかった。また、張秀山に発言を求めたのは批判された側である安子文と劉少奇にほかならなかったという。さらに、毛沢東も一〇月一三日深夜、張を呼び出し、彼の中央組織部に対する意見を聞いた後、翌日発言するよう求めていたのであった。[34] これが事実であるとすれば、またしても攻撃側を煽った責任は主席の側にもあるのである。張秀山が一〇月一四日に発言を行った後、劉少奇は彼に次のように語ったという。「あなたが会議の席で語った問題のあるものは、安子文の問題ではない。私の誤りだ。これについては、以後、適切な会議で私は自己批判しなければならない」。[35] 同月一五日には郭峰が発言し、やはり中央組織部がある種の「右」の偏向を犯していることを批判した。[36]

ところが、以上の発言は一部の参加者の反感を買い、討論の段になって、華東、西北、東北の代表たちの意見

は一致したが、華北が断固として反対し騒然となったため、会議の進行が不可能となった。そのため、毛沢東は会議をいったん休会とし、まず中央組織部内部に団結を回復することをめざしたのであった。[37] この会議の領導小組の会合で劉少奇は次のように述べた。「中央は、問題が中央組織部内部の不団結、矛盾にあることを認めた。そのため、中央は暫時会議を停止し、まず領導小組会議を開き、**中央組織部内部の問題、すなわち饒漱石と安子文の矛盾の問題**を解決することを提案したのである」。[38] そこで、一〇月一九日から二一日にかけて、三夜連続で毛沢東が主宰する中央書記処拡大会議が開催され、中央組織部内部の論争について話し合ったという。[39] 彼がこのとき重視したのは、明らかに党内における団結の回復であった。毛は一〇月二二日の劉少奇の講話に対して次のようなコメントを述べた。「現在は全党が団結して真剣に党の過渡期の総路線を実行するときである。われわれはひとつの遅れた農業国をひとつの工業国に変えなければならず、われわれは現存の農業、手工業、および資本主義の商工業に社会主義改造を施さなければならず、われわれはおよそ一五年前後の時間内にこの偉大な任務を完成させなければならず、われわれの組織工作はこの総路線のためにしっかりと尽くさなければならない。私は同志諸君がこの任務を担うことができると信じる」。[40]

かくして、趙家梁の表現を借りれば、会議の方向は一八〇度転換したのであった。すなわち、組織工作におけるブルジョア階級的な「右傾」の誤りを批判することから、饒漱石による団結を破壊する言動を批判することへの転換であった。劉少奇と安子文がそれぞれ自己批判を行うと、毛沢東はそれ以上この両者を追及することはなかった。[41]

一九五三年一〇月三日から一一月二日まで、高崗には休暇が与えられ、秘書などとともに華東および中南地区（南京、蘇州、無錫、上海、杭州、広州、長沙、武漢、鄭州）を専用列車で回った。[42] 行き先は当初、大連が予定されていたが、陳雲の勧めで南方に決めたという。その際、陳雲はついでに杭州にいる林彪に会うとよいと高に告げ

たのであった。[43] また趙によれば、一〇月三日の出発直前、中央公安部長の羅瑞卿が、毛沢東が突然泡を吹いて倒れたとの知らせをもって駆け付け、心中に不安を抱いての出発となったという。[44] 正統的な文献が語るところ、この旅行の途中、彼は杭州で療養中の林彪およびその他の軍の幹部たちと密談を重ねたのであった。その際、彼はいわゆる「軍党論」（党は軍によって作られたものであるという議論）なるものを散布し、また党・国家機関は「白区の党」の人々に握られていると主張し――それはまさに八月に毛沢東が厳しく批判した観点であった――それゆえ党中央と国家機関は改組されねばならず、その際、自分は党中央副主席あるいは総書記におさまり、同時に政府の総理になると述べたという。[45] とはいえ、高崗が南方旅行の最中に不穏な行動をとったという主張について、それを具体的かつ直接的に明らかにする文書は見当たらない。[46]

一〇月七日に杭州に着くと、高崗はすぐに林彪に会いに行ったようである。[47] その際、高崗が林彪に対して、二ヵ月前に彼に宛てた手紙のなかで提起した部長会議の主席就任の話を再び持ちだしたということは十分ありうるように思われる。だが、『林彪伝』の作者が、林彪夫人の葉群が高崗夫人の李力群に宛てた一一月二八日付の手紙を引用して述べるところ、療養に専念したい将軍はこのような高崗の提案にはまったく関心がなかったのであった。[48] もしこれが事実であるとすれば、後に鄧小平が述べるように、高崗は林彪の支持を取り付けていたがゆえに「やりたい放題やった」のではなかったことになる。

一〇月二四日、趙家梁の語るところ、杭州に突然、中央農村工作部副部長の陳正人がやって来て、北京で開催された中央組織会議で安子文が批判され、その批判が劉少奇にも向けられていると告げたのであった。[49] 趙は高崗がそれまで中央組織会議の進行状況について、何も知らなかったかのように書いている。そうだとすれば、同会議での安子文に対する集中攻撃に、やはり高崗は関与していなかったのかもしれない。

同日深夜、趙によれば、広州へ向かう列車のなかで高崗は趙らに対して党史の編纂と、それに関連する劉少奇

の評価について次のように語ったのであった。すなわち、中国共産党の歴史において、主要なのは革命根拠地の歴史である。あるいは、革命根拠地の発展を主線として描かなければならない。一方、白区の工作は、成果はあったものの、その作用は大きくなく、根拠地と並べて論じるわけにはいかない。中国共産党第七回全国代表大会の際、劉少奇が毛沢東の後継者として認められた。しかしその後、主席は劉少奇に失望した。とりわけこの数年、劉少奇はなんら主席を助けておらず、また何の工作もしていない。劉は左と右の間を行ったり来たりし安定していない。主席が舵を取らなければ劉少奇が舵を取るというのは危険である、と。[50]

(4) 一九五三年末における事態の急展開

正統的文献は、高崗が北京に戻ったのち、陳雲と鄧小平を味方に引き入れて劉少奇を打倒しようと企てたとしている。高の取り込み工作の対象となったと述べる陳雲は、後に当時のことを次のように振り返っている。「毛沢東同志が第二線に退くといった時のことだが、この時、高崗が慌てて私を訪ねてきた。彼は、党の書記処が党の総書記あるいは副書記について討論することがあるだろう、劉少奇同志は総書記あるいは副書記を任されるだろうといった。そこで、高崗は自分が副主席になるのはどうかといってきた。賛同を得るために、彼は私にいった。『いくつか余計に副主席を設けよう。君がひとつやり、私もひとつやる』。[51] また、鄧小平も後の一九八〇年三月、当時をこう回想している。「毛沢東同志が一九五三年末に中央を一線と二線に分けることを提案した後、高崗は非常に積極的に活動した。彼はまず林彪の支持を取り付けていたから、このようにやりたい放題やったのだ。その時、東北〔の指導者〕は彼自身、中南は林彪、華東は饒漱石だった。西南に対しては、彼は引っ張り込む方法で正式に私と談判した。彼は劉少奇同志が未熟であるといい、私を味方に引き入れて一緒に劉少奇同志を打倒しようとしたのだ。私は態度を明確にし、劉少奇同志の党内の地位は歴史的に形成されたもので、総じてい

えば、劉少奇同志は優れており、このような歴史的に作られた地位を改変するのは適当ではない、と答えてやった。高崗は陳雲同志も訪ねて談判し、こういった。いくつか副主席を設ける。君がひとつ、わたしがひとつ、と。このようにして陳雲同志と私はようやく問題が深刻であることに気が付き、ただちに毛沢東同志に報告し、彼の注意を引いたのである」[52]。こうして、正統的文献は、高崗の摘発に陳雲と鄧小平が果たした役割を特筆している。だが、陳雲と鄧小平を味方に引き込もうとしたとされる高崗の努力について語るのは、以上の陳と鄧による事後の説明だけなのである。

『陳雲年譜』には、同年一一月（日付は記されていない）、劉少奇と陳雲が高崗に面会を求め、彼を説得し団結をはかろうとしたとある。その際、劉は自己批判を行ったが、高崗は何も意見を述べなかったという[53]。

当時、党中央辦公庁主任を務めていた楊尚昆の回想によれば、同年一二月一三日、毛沢東は上海から同市党委員会書記の陳毅がやってくると、彼に饒漱石の状況について質問した。その数日後（『毛沢東年譜』の記述からすると、おそらく一五日であろう）、主席は再び陳毅を呼び出し、高崗と饒漱石の問題について会話を交わしたという[54]。同年一二月一五日、中共中央書記処会議の席上、毛沢東は自らが休暇を取る期間中、劉少奇に中央を主宰させることを提案した。劉少奇は回り番で主宰するのがよいと述べたが、他の指導者たちは、やはり劉少奇が主宰するのがよいと発言した。高崗だけが回り番を主張したという[55]。楊尚昆によれば、これは毛沢東が高崗の出方をみるために拵えた仕掛けであった[56]。そして『高崗伝』の著者たちのみるところ、この時の高崗の言行が、毛沢東に高崗問題をこれ以上長引かせてはならないと認識させたのであった[57]。『毛沢東伝』上巻にも、「一二月中旬、高崗が以前よりもひどく党を分裂させ、党と国家の最高権力を簒奪しようと愚かにもたくらんだ時、陳雲と鄧小平が毛沢東に高崗の陰謀活動を報告し、毛沢東の注意を引いた」[58]との記述があり、ここでもまた陳雲と鄧小平の果たした役割が強調されると同時に、重大な決断がこの時に下されたという印象を与えている。とはいえ、歴史家

である林蘊暉の考証によれば、高崗が「回り番」に賛成した――実際には、朱徳もまた賛成していた[59]――ことは、何ら不自然ではなく、彼の野心が露見したものとみるべきではないのである[60]。

一九五三年一二月一七日から一九日にかけて、毛沢東は陳雲、鄧小平、周恩来、彭徳懐らと、あわただしく連日会談を行った[61]。おそらく高崗に関する問題について話し合われたと思われるが、正統的文献は、奇妙にもこの一連の会談内容について完全に沈黙している。ともあれその結果、主席は、高崗が先に訪れた南方各地に陳雲を派遣することを決定したのであった。二〇日には、毛は劉少奇とも会談しているから、おそらく劉とも高崗の問題について語り合ったのであろう[62]。陳雲は杭州で林彪に対し、高の仕掛けた罠にはまらないよう注意すると、林彪はもはや高崗を支持しない旨明らかにしたとされる[63]。

趙家梁の記述に従えば、同年一二月二三日夜、毛沢東は高崗と会って、彼を批判したが、高は自己批判しなかったという[64]。翌日、毛沢東は中央政治局拡大会議において、党内団結の強化に関する決議の起草を提案した。この会議中、毛は「北京には二つの司令部がある。ひとつは私を頭とする司令部で、陽風を吹かせ、陽火を燃やすものである。もうひとつは、別の人間を司令官とする司令部で、月の風を吹かせ、月の炎を燃やすものであり、地下水である」と発言した[65]。この発言を聞いて、高崗はようやく毛沢東の自分に対する不満を理解したという[66]。これ以降、毛沢東は「休暇のため」北京を離れ、杭州に滞在した[67]。主席は同月二六日に上海に到着すると、翌日午後、すでに現地に滞在していた陳雲の宿舎を訪ねた[68]。おそらく、毛は陳から高崗の南方での活動につき、詳細な報告を受けたと思われるが、報告内容は『陳雲年譜』にも『陳雲伝』にも一切記載がない。

同日、楊尚昆の回想に基づけば、毛沢東はやはり上海で華東地区の指導者である譚震林、張鼎丞、粟裕と饒漱石の問題について話し合った。その際、主席は「党と人民に対して忠実で真面目であることはよいことだ。陰謀家、野心家に対しては忠実であってはならない！　陰謀家、野心家に対して忠実であることは、罠にはまること

だ」と述べたという。[69] もしこの発言が事実であるとすれば、毛沢東は一九五三年末までに高崗と饒漱石に対して「陰謀家」、「野心家」というレッテルを用意していたといいうるが、それを裏付ける他の証拠は見当たらない。

同月二八日、高崗は瀋陽に赴いて東北局の会議に参加し、毛沢東による党の団結強化に関する指示を伝達した。その際、彼は劉少奇の歴史的功績を強調し、毛の北京不在中、劉が中央の工作を主宰することを支持するよう訴えたという。[70] これが事実だとすれば、この時までに高崗は、いたずらに劉少奇を攻撃してはならないという毛沢東の暗黙の、だが明瞭な指示に気が付いたのである。だが、もはや手遅れであった。

一九五三年一二月二九日、毛沢東が不在の北京で劉少奇が主宰する中央書記処拡大会議が開催され、「党の団結強化に関する決定（草案）」を採択した。正統的文献によれば、同草案は、財経工作会議と中央組織会議の前後に暴露された高崗・饒漱石の反党分裂活動に対して起草されたものであるという。[71] 翌年一月三日には毛沢東が杭州で駐華ソ連大使ユージンと会見し、同大使に不気味な予言を述べた。「われわれの党内で、あるいは国内で騒ぎが起ころうとしている。もちろん、今日私が話しているのは一種の可能性にすぎず、将来情況がどのように発展するか、様子をみなければならない。この騒ぎの性質は、一言でいえば、私を打倒しようとする者がいるということだ。われわれ中国の歴史上、秦が六国を滅ぼしたことがあった。秦が楚を滅ぼしたのである。秦とは彼らの陝西（毛は指で私を指した）であり、楚は湖南（毛は指で自分を指した）のことである。これは歴史上の事実である。ならば今はどうであろうか。少し待ってみなければならない」。[72] 翌日にも、毛沢東は同大使と会見したが、不可解なことに、大使が伝える主席の言葉は、昨日と比べて穏やかな調子であった。毛はこう述べたという。「最近いくらかの不健全な現象が現れた。この現象は蔓延してはいないが、この現象のために中央委員会のメンバーでさえも影響を受けている。だから、それを重視しないわけにはいかない。……ある人々は政治局メンバーの偶然のミス、あるいは誤りを公式化〔ママ〕し、それによってこれら同志の名誉を傷つけようとしている」。[73]

（5）第七期四中全会（一九五四年二月）とその後

党の団結強化に関する上記草案は、毛沢東の滞在する杭州で一月四日に検討が行われ、翌日、再び修正稿につき議論がなされた。[74] この修正稿をもって楊尚昆は九日、北京に帰り、一〇日から一七日まで劉少奇らと会談を重ね、さらに杭州に戻って、その結果を杭州にいる毛沢東に伝えたのであった。[75] この入念な検討ぶりから、党の団結強化という問題が毛沢東にとって大きな重要性をもっていたことがうかがえる。上記草案について、主席はそれを中央委員会全体会議（第七期四中全会のことを指している）で通過させ、慎重を期すことが必要だと述べた。[76]

正統的文献が語るところ、高崗は上記草案を読み、また第七期四中全会が目前に迫っていることを知ると戦戦恐恐とし、急いで毛沢東に書簡をしたためた。書簡のなかで、高崗は上記草案に完全に賛成すると述べるとともに、来るべき第七期四中全会で自己批判を行いたい、ついてはその前に主席と面会したいと申し出たのであった。[77] この書簡は一月一九日、楊尚昆に託され、彼はこれを劉少奇に見せた。劉は一読後、周恩来、陳雲、鄧小平、彭真、李富春とこの書簡への対応につき話し合った。[78]

一月二二日、高崗の手紙について毛沢東が劉少奇に送った電文は次のようなものであった。「楊尚昆同志が到着し、必要な文献は受け取った。また高崗同志の手紙も受け取った。高崗同志は手紙のなかで党の団結強化に関する決議草案を完全に支持し賛成し、誤りを犯したので四中全会で自己批判を行うつもりで、会議前にこちらに来て、私とこの件について相談したいと言っている。私は〔四中〕全会はすぐに開き、高崗同志にここ〔杭州〕に来させるべきではないと思う。彼が相談したい問題については、あなたと〔周〕恩来同志あるいはさらに〔鄧〕小平同志を加えて彼との間で相談すればよい。四中全会の方針に関しては、文献を発表する者を除き、いかなる同志の自己批判も歓迎する。だが、できるだけいかなる同志に対しても批判を避け、過ちを犯した同志が目覚めるのを待つべきである……この電報を高崗同志にも見せてほしい」。[79] 以上のような毛沢東の提案に基づき、

劉少奇、周恩来、鄧小平は一月二五日と二月五日の二度にわたって高崗と会って話をした。[80] だが、いずれの文献も、その際の会話の内容を明らかにしていない。『高崗伝』の作者たちの述べるところ、毛沢東に面会を断られた高崗は失望したが、「まだ絶望してはいなかった」。[81]

一月二八日、毛沢東は、来るべき第七期四中全会の方針をあらためて楊尚昆に示した。主席の語るところ、積極的な面だけを語らせ、あまり多くの人間に発言させてはならない、会期は二日間とし、いかなる同志に対しても具体的な批判を展開しないこととする。高崗の目的は「過関」（難関を潜り抜けること）にある。事前に根回しをしておけば、「平和会議」（原文は「和平会議」）の目的は達せられるのである。[82] 二二日付の劉少奇宛電文の内容と併せて考えれば、毛沢東は第七期四中全会を一種の集団的な自己批判の場とし、比較的短期間のうちに、平和裏に終わらせることを目論んだのであった。それは前年の財経会議と中央組織会議の混乱の苦い経験からすれば当然であったかもしれない。

同年二月六日から一〇日にかけて、第七期四中全会が開催された。高崗はズボンのマチの部分に二〇錠の睡眠薬を忍ばせて会議に臨もうとしたが、妻の李力群に発見され果たせなかった。[83] 二月六日、劉少奇が政治局を代表して報告を行い、その後「党の団結強化に関する決議」が採択された。同決議は、高崗・饒漱石の名前を伏せながら「ある高級幹部までが、党の団結の重要性に対する認識を欠いている」とし、「党内での分派活動や分裂活動」への警告を行った。この決議は、皮肉にも後に劉少奇自身に向けられることになる、帝国主義は必ずわれわれの党内に代理人を探し求めるという恐るべき警告を含んでいた。「われわれの党内には張国燾が生まれ、ソ連の党内にはベリヤが生まれた。このように重大な歴史の教訓は、敵は必ずわが党内に彼らの代理人を探し求めるだけでなく、過去に探し当てたことがあり、今後もまた、ある種の不安定で不忠実な、さらには悪意ある分子を探し当て彼らの代理人とする可能性を示している。これはわれわれが厳重に警戒しなければならないことであ

る」。一方、この決議には、「反党集団」や「反党連盟」の文字は見当たらず、また誤りを正そうと考え、実際に正している同志に対しては、「病を治して人を救う」という方針とるべきであるとの文言が付け加えられた。[84] 同日、高崗が第一回目の自己批判を行った。[85] 二月八日には、饒漱石が自己批判を行った。[86] この会議最終日に劉少奇は、事前の毛沢東の指示に従い、自身の過去の活動に関する包括的な自己批判を行った。[87]

第七期四中全会に続き、二月一五日から二五日にかけて、周恩来が主宰する高崗問題座談会（高崗は二日間出席したのみであった）、および鄧小平、陳毅、譚震林が主宰する饒漱石問題座談会が合計七回開かれた。これらの座談会は、劉少奇、周恩来、鄧小平の年譜が一致して述べるところ、中央書記処の決定を受けて開催されたものであった。だが、奇妙にも、そのような決定を下した中央書記処会議がいつ開催されたか、資料には一切記載が見当たらない。[88] ともあれ、この「座談会」と称された会合は、実際には高と饒に対する集中的かつ一方的な批判の場に他ならなかった。その雰囲気は、出席者の一人である張明遠によって次のように記録されている。「高崗問題を摘発する座談会は毎日午後、周総理のオフィスの壁を隔てた小さな会議室で行われた。開始からきな臭さが濃厚だった。高崗が振りまいた劉少奇に対する不満は、党中央と毛主席に対する攻撃だというのである。ある者は高崗が陰謀をめぐらし、野心を抱き、党と国家の最高権力を簒奪しようとしたなどといった。しかし、高崗は劉少奇に反対したことを認めただけで、毛主席に反対し『党と国家の指導権力を奪い取る』ことを目論んだことは認めなかった」。[89] 二月一五日、座談会の席で高崗が二度目の自己批判を行った。翌日夜、彼は毛沢東と周恩来それぞれに宛てた手紙（遺書とみられる）をしたため、一七日午後一時半頃、警護員に無理をいって借りたピストルで自殺を試みたが未遂に終わった。[90] 彼の自殺の企ては、党に対する（そして毛沢東に対する）一種の抗議と理解された。そのため、この自殺未遂は、高崗を中央から放逐するものの、陝西省で引き続き仕事をさせようと考えていた毛沢東から、最後の寛容を奪い取ってしまった。[91]

二月二三日、饒漱石が饒漱石問題座談会で二度目の自己批判を行った。[92] 二月二五日、高崗問題座談会最終日、周恩来が長大な総括報告を行った。総理は一〇項目にわたる高崗の罪状を並べた後、こう結論付けた。「以上にあげた高崗の主要な活動からみて、高崗がいかに卑劣にも一人の共産党員としての二〇年余りの革命生活から資産階級個人主義野心家の泥沼に転落したか、いかに卑劣にも自己の資産階級個人主義の面目によってわれわれの党と国家を改造しようとしたかがわかる。……高崗のこの種の暗黒面の発展は、彼を一歩一歩、資産階級のわが党内における実際の代理人としたのである」。[93]「資産階級の党内における代理人」という表現は、翌年に開催された党全国代表者会議における鄧小平の高崗・饒漱石問題に関する報告においても採用されることになる。周恩来によるこの総括報告の要綱は、報告後に毛沢東に送られた。主席は周の報告要綱に対して、とくに修正意見を述べることなく、高崗の「個人主義」、「私生活の堕落」、「最近時期の反党行為」といった文言を追加した。[94]

同年三月四日、毛沢東は二月二六日付東京発のＵＰ通信社の記事に次のような思わせぶりなコメントを記した。「ＵＰ通信社が、日本人が高崗について論じているのを伝えているのは注意に値する」、「日本の情報機関は高崗をよく知っている。アメリカと日本の情報機関は、合作しているのだ」。[95] しかし、主席のそれまでの言動からして、彼が本気で高崗と日米の情報機関のつながりについて疑っていたとは考えにくい。おそらく、このコメントは高崗事件とベリヤ事件との類似性を人々に想起させ、高の罪状をより膨らませるために毛が施した小さな細工であった。

同年八月一六日、高崗は電線を使って感電自殺を試みるも妻に見つかり、失敗に終わった。だが、翌日未明、睡眠薬「速可眠」を大量に服用し自殺した。[96] 党中央がソ連に対してこの事実を報告したのは二週間後の九月一日のことであった。[97]

翌年三月二一日から三一日まで、中国共産党全国代表会議が開催され、この会議で初めて公然と高崗・饒漱石

による「反党連盟」の問題が取り上げられた。鄧小平がこの問題について調査報告を読み上げた後、最終日に「高崗・饒漱石反党連盟に関する決議」が採択された（発表は四月四日付であった）。これによって、事件はようやく一般党員の間にも知れ渡ることとなった。

同会議期間中の三月二六日、毛沢東はユージン大使と会見し、高崗問題に関する彼の総括ともいうべき見解――正統的文献が一切言及しない主席の発言である――を述べた。「長い間、私は党内外で何か問題があるとずっと感じていた。大地震が間もなくやって来る直前のように、ここが揺れ、あそこが揺れるのを感じていたが、地震の中心地がどこかわからなかった。昨年六月から七月の間の中共中央が開催した財経問題に関する会議で、こうした感覚はとりわけはっきりとしたものになった。間もなく、一九五三年七月から九月の間、私は党内に二つの中心があることを強烈に感じた。ひとつは党中央委員会だった。だが、もうひとつは隠れていてわからなかった。揺れが始まるとますます激烈になった。**一二月二四日、政治局内でこの問題に対する討論を行ってから、事情ははっきりしてきた。**いまやわれわれはこの揺れがどこから来たのか知っている。もちろん、これは地震がその他の場所で起きないことを意味するものではない。……現在、中央は高崗がはたして帝国主義者と関係がなかったか明らかにしようと考えている。……まさに分裂を目論む分子が自分の名義を借りて多くの同志を騙したため、私は迅速に明確に自分の態度と立場を表明しなければならなくなった。そうでなければ、派閥闘争は伝染病のように迅速に党内に蔓延しただろう。……そして、毛は半分冗談のようにいった。毛沢東が高崗を政治局員にするよう提案したのではないか、そして彼を中央政府の副主席にしたのではないか。現在、同志たちは一方で高崗事件を処理する各種の方法を採択しながら、他方で中央はなぜすぐにこの事件に気が付かなかったのかと問うている。毛は答えていった。明らかに彼自身が、目がみえなかったからだ、と。そこで同志たちはまた問う。あなたが、目がみえないというなら、どうして仕事ができるのか、と。これに毛はこう答えた。私は今また目が

みえるようになったのだ、と。この面で、毛は自分が昨年末気分がすぐれなかったことに気づいた。**ソ連のベリヤ事件の処理は、中共中央が高崗の反党活動を暴露する適切な方式を探し当てるのに役立った。**あの時、彼は高崗が反党活動を行っていることを疑ってはいたが、まだ確実ではなかった。これが、彼が高崗と付き合う際に警戒を保っていた原因である。私〔ユージン大使を指す――高橋〕はいった。私はなぜあなたと杭州で会った際〔一九五四年一月三日―四日の会見を指す――高橋〕、あなたがベリヤのことを政治局メンバーに教えるよう要求しながら、高崗の話を持ち出さなかったわけがわかった。毛はいった。**あの時、中央はまだ事態を完全に明らかにできていなかった。初めのうち、彼らは〔中央委員会〕全体会議を開催する必要はないと思っていたが、後になって全体会議を開催しなければならないと決めたのである**」[98]。毛沢東による以上の言明は、主席が高崗の活動の危険性に気づいたのが、ようやく一九五三年末になってであること、しかしこの問題をどう処理すべきか悩んでいたところに、ベリヤ事件の詳細がソ連から伝えられ、それを参考にこの問題の処理方式が決定されたことを示唆している。

次いで、四月四日には第七期五中全会が開催され、上記「反党連盟に関する決議」を承認し、これにより事件は終結した。ついでにいえば、この会議で高崗の摘発に大きな役割を果たしたとみられる鄧小平、および高崗の誘いを受けたが彼に加担しなかった林彪は政治局員に昇格したのであった。

Ⅱ　高崗粛清に関する従来の諸説の検討と新たな仮説の提示

新しい文献によってより詳細となると同時に、関連する資料の奇妙な欠落――おそらく意図的な欠落と推察される――もまた明らかとなった以上の経緯に照らして、以下ではこれまで提起された高崗粛清の理由に関する諸

説を検討しよう。従来の諸説は以下の四つに分類しうる。第一は、中国共産党自身による正統的見解である。すなわち、高崗と饒漱石は「反党連盟」を結成し、党と国家の権力を簒奪し、党を分裂させようと目論んだために粛清されたとするものである[99]。以下、これを便宜上、第一説と呼ぶ。

第二は、ソ連（あるいはスターリン）との密接な関係ゆえに、高崗は重用され、そして粛清されたとする説である[100]。この説は、スターリンの死後に（そして朝鮮戦争終結後に）摘発が行われたというタイミングを重視する。一九五四年一二月下旬から翌年三月中旬までの毛沢東の「かくも長き不在」は、粛清の国際的影響を小さくするためにとられた措置だと説明される。以下、これを第二説と称する。

第三は、求心力が弱まっていた党に再び凝集力を与えるために、高崗は饒漱石とともにスケープゴートにされたとする説である。徳田教之は、「二人の実力者に攻撃を集中するというショック療法を採用する」ことによって指導部内部の葛藤を克服しようとしたのだと主張している[101]。以下、これを第三説と記す。

そして第四の説は、劉少奇（および周恩来）に冷水を浴びせ、そして彼らを毛沢東に忠実ならしめるために毛が仕組んだ陰謀であったとするものである[102]。したがって、高と饒の粛清は毛にとって、それ自体が目的であったというより手段であったということになる。フィリップ・ショートはいう。「毛に彼ら〔劉少奇と周恩来を指す――高橋〕を排除する意図がまるでなかったことは明らかだ。だが一方で毛は、最も親しいこの同僚二人の地位に揺さぶりをかけようとした。高崗の野心を道具に二人の立場を揺るがせ――もっと自分の意図をくむように強いて、その思想にもっと同調させたのだ。高崗は毛の意図を全く誤解するほど愚かではなかった。ただやりすぎてしまったのだ」[103]。以下、これを第四説と呼ぶ。

以下では、以上の諸説をひとつずつ検討しよう。第一の正統的見解が主張する「反党連盟」は、どうみても根拠が薄弱であり、事実を反映していないように思われる。歴史を遡っても、高崗と饒漱石は、ともに仕事をした

経験がなかった。そのうえ、趙家梁によれば、饒漱石が長い間、白区と新四軍で工作を行っていたため、高は饒を劉少奇によって抜擢され、重用されている人間とみていたのであった。北京に来てからも、高崗は饒漱石と職務上の接点がなかっただけでなく、個人的な関係もなかった。[104] なるほど党中央の会議の場で両者が同席することはあったとはいえ、少なくとも一九五三年以前に、彼らが緊密な関係をもっていたようにはみえない。ならば、同年夏以降はどうであったか。同年夏の財経会議において、二人はともに会議の領導小組（主宰者集団と考えてよいであろう）のメンバーであった。そして両者ともに、薄一波と安子文を厳しく批判した。楊尚昆の回想によれば、饒漱石に至っては、同会議の期間中の七月二二日および二五日に開催された中央組織部内の会議においても安を執拗に攻撃し続けた。[105] だが、このように述べる楊尚昆も、そして批判された薄一波もとともに、高崗と饒漱石の共謀に関する具体的証拠を何ら示してはいないのである。

同年秋の全国組織工作会議については、高崗はそもそも出席しておらず、また趙家梁の証言にあるように、腹心の張秀山、郭峰の発言原稿に事前に目を通すことを拒否していたとすれば、張と郭の安子文に対する攻撃と饒漱石の安に対する攻撃は、あらかじめ高と饒が共同で立てた事前の計画に従ったものであったとはいいがたい。南方への休暇旅行に出かけていた高崗が、同会議の状況について逐一報告を受け、会議参加者を遠隔操作していたことをうかがわせる記述は、文化大革命時期に書かれた悪意あるパンフレットを除けば、いかなる資料にも見出すことはできないのである。[106] 毛沢東に高と饒が共謀していると思わせた可能性のあるエピソードはただひとつ、一九五三年秋に高崗が南方から北京に戻った後、饒漱石が中央組織会議で批判されたことについて、高が毛沢東に対して二度にわたり弁明に努めたことである。[107] だが、もしこの事実だけをもって高と饒が「反党連盟」を結成していると主席が判断したなら、それは牽強付会といいうる。おそらく、「反党連盟」という表現は、彼らが摘発された後、彼らの罪を事後的に、意図的に、そして政治的に膨らませるために毛沢東が用いた不正確なレッテ

ルなのであろう。[108]

第七期四中全会後に登場した高と饒による「反党連盟」という表現が、当初から党内で疑問にさらされていたことは、毛沢東自身が党全国代表者会議の結論における、いささか苦しい弁明のなかで明らかにしている。「第一点、ある者は、いったいこの連盟があったのかどうかと問うている。あるいは連盟ではなく、二つの独立王国、二つの単独経営ではないか、と。ある同志はいう。文献が見当たらない、彼らが連盟だというなら、ひとつの協定があるはずである、協定には文字がある、だが文字による協定などというものはたしかにない、見当たらないのだ、と。われわれはいおう。高崗と饒漱石には連盟があったのだ、と。……彼らは陰謀を企んだのだ！　陰謀を企むのに、文字にした協定がいるのだろうか。もし文字にした協定がなければ連盟ではないというなら、高崗と饒漱石という二つの反党集団内部はどうするのだ。高崗と張秀山、張明遠、趙徳尊、馬洪、郭峰の間にも条約〔ママ〕はなかったというのか。われわれは彼らの間の文字協定もみたことがないだろう。それなら、この反党集団〔の存在〕も否定するのか！」[109]。おそらく、当初から「反党連盟」というレッテルは、少なからずの指導者たちに事実を反映していないかもしれないという疑念を与えていたのである。

同様に、高と饒が党と国家の権力を簒奪しようとしたという主張も根拠に乏しいように思われる。一九五三年夏の財経会議の際、「路線上の誤り」を犯していると薄一波を厳しく叱責した――そしてその背後にいる劉少奇を間接的に批判した――のは毛沢東その人であった。したがって、高と饒はまさに主席の側に立っていたのである。おそらく、趙家梁が指摘するように、高崗は「批薄射劉」の企てが、あくまで主席の意向に沿うものと信じていたがゆえにそうしたのであった。[110] 実際、高崗と饒漱石が毛沢東の意思を意図的に踏み越えようとした証拠は、まったく見出すことができない。両者は主席が彼らをとがめた際には、きわめて従順に振る舞うことしかしなかった。これら東北と華東の二人の実力者は、すべての人間を付き従えようとするより、自らが付き従うべき人

間を求めていたようにみえる。

たしかに、前述のように主席は一九五四年一月三日、ユージン大使に対して自分を打倒しようとしている者がいると述べ、クーデターの可能性をほのめかした。だが、それは高と饒を無力化する決定をすでに下した後で、それを正当化するための口実であったと考えることもできる。正統的文献が主張するように、一九五三年秋の休暇旅行の最中、たとえ高崗が南方各地において、「軍党論」を散布し、劉少奇を引きずり下ろす企てへの協力者を募ったとしても、それが毛沢東、ひいては党それ自体への挑戦を意味していたと考えることは難しい。

より評価が難しいのは、高崗と饒漱石が党を分裂させようと企てたという主張である。そもそも、薄一波を厳しく批判することで、党内対立を顕在化させたのは、毛沢東であった。したがって、党分裂の危機を作り出した責任は主席自らが負うべきである。ただし、高が極端な反劉少奇の姿勢をとり、その旗印のもとに多くの党内有力者を糾合しようと試みたことは事実かもしれない。その場合でも、少なくとも主観的には、彼は党を分裂させようと考えていたわけではなかったであろうが。

奇妙なことに、正統的文献は、高崗が南方各地で奇怪な言論を振りまいたとしながら、彼がいつ、誰を、いかなる議論をもって取り込もうとしたか、そしてその成果がいかなるものであったかをまったく語らないのである。[111] この記述の欠落について、一九五四年二月に開催された第七期四中全会が、高崗と饒漱石だけでなく、劉少奇をはじめ参加者の多くが自己批判しあう奇妙な会議となった事実に鑑みれば、[112] 可能な推論はこうである。すなわち、一九五三年の秋、高崗に籠絡されかけた指導者たちがたしかに存在したけれども、毛沢東は彼らが高崗との関係を断つことを条件に彼らの責任を不問に付し、それ以上追求しようとしなかったということである。正統的文献が高崗によって取り込まれそうになった指導者たちについてまったく語らず、したがって彼らに批判の矢を放っていないのは、まさにこのような取引の結果であったかもしれない。

だが、もしそうだとすれば、陰謀をめぐらせたのは高崗というより、毛沢東のほうであるように思えてくる。正統的文献は、一方の側に野心的で無謀な高崗を置き、他方の側にリアクティブ（反応的、すなわち何らかの事態が発生したためにそれに対応せざるをえなくなった）で思慮深い（あるいは政治的計算に長けた）毛沢東を置く。一方、先に述べた第二説、第三説、および第四説は、いずれも一方に野心的で無謀だが哀れな高崗を置き、他方にプロアクティブ（能動的、すなわち先回りして手を打っておく）で思慮深い（あるいは政治的計算に長けた）毛沢東を置くのである。たしかに、正統的文献はいくつもの重要な点について沈黙することによって、かえって「毛沢東による陰謀説」に力を与えている。一九五三年秋、高崗は南方への休暇旅行の最中、地方の指導者たちおよび軍の指導者たちと、そして何よりも林彪といったい何を話していたのだろうか。同年一二月中旬、陳雲は毛沢東に何を告げたのだろうか。そして、この両者は何を語り合ったのだろうか。さらに、同月二三日、主席と高崗はいかなる会話を交わしたのだろうか。これらの点について、正統的文献が語らない――おそらく意図的に――ことは、毛沢東が、たしかに目に余る問題を起こしていたが、本来ならば除去するまでもなかった指導者を、ある一定の政治的目的に従って、あえて除去したとの観測の出発点となりうるものである。

はたして毛沢東が、高崗に対する漠然とした不信感（それは彼に対する高い評価と必ずしも矛盾するわけではない）ではなく、高が阻止しなければならない危険な活動を行っているとはっきりと認識したか、あるいは政治的意図をもってそのように断定したのはいつの時点であろうか。筆者のみるところ、それはやはり一九五三年一二月中旬であり、それよりは早くないであろう。たしかに、すでに述べた財経会議終了後の主席の高崗と張明遠に対する発言からみて、主席は「二つの司令部」、「白区の党」と「ソビエト区の党」などという、最高指導者として看過できない流言について同年夏には知っていたといいうる。そして、彼はこの流言の出所が高崗であると疑っていたかもしれない。だが、もしこのときに毛が、高こそがこの党内に不和をもたらす噂の出所で、しかも

彼が党分裂を画策していると認識していたなら、秋の終わりまで高崗を放任することはなかったはずである。したがって、主席はおそらく一九五三年夏には高崗の動きに疑念を抱き始めていたが、それは漠然としたもので、それまでの高に対する高い評価を根本から覆すものではなかったのである。

毛沢東の高崗に関する疑念を確信に変えたのは陳雲（そして鄧小平）であったかもしれない。同年一二月中旬、陳雲が高崗に関する事実を誇張して伝えたということはありうるように思われる。[113] というのも、陳雲は高崗と個人的関係が緊密である一方、毛沢東との関係も芳しいものではなかったからである。[114] 推測の域を出ないが、陳雲はここで高崗との関係を清算することによって、陳にも向けられていたかもしれない毛沢東の疑念を払拭すると同時に、主席との関係改善を図ったのかもしれない。

あるいは別の可能性として、毛沢東自身がさまざまな情報を総合した結果、高崗を排除しなければならないとの結論にたどり着いたのかもしれない。その場合、陳雲（および鄧小平）の提供した情報は、主席に高崗の危険性を確信させるひとつの有力な証拠となったであろう。さらに別の可能性として、毛沢東と陳雲（および鄧小平）が共謀して、高崗の真の危険性はどうであれ、彼を排除することを決定したのかもしれない。いずれの可能性がより真実に近いか、筆者は断定するに足る根拠を手にしていない。ともあれ、毛沢東によって「陝北王」と呼ばれた人物の運命はここで決まったのであった。

一二月中旬以降、主席にはいささか慌てた様子がうかがえる。毛は、陳雲に高崗が南方を回った後をあたかも「除染」させて回り、「党の団結強化に関する決議」を起草させ、そして第七期四中全会を急いで準備させたのであった。つまり、毛沢東は一九五三年夏から秋にかけて徐々に高崗に対する疑念を膨らませ、やむを得ず最後に彼を粛清する決断を下したというよりは、同年一二月中旬に至ってようやく事態が切迫している――それは陳雲（と鄧小平）によって誇張された脅威であったか、あるいは主席自らも誇張することに同意した脅威のいずれか

であったように思われるが――ことに気が付き、慌てて手を打ったとみるほうがよいように思われるのである。

したがって、一方に野心的で無謀な高崗を置き、他方の側にリアクティブで思慮深い毛沢東を置く正統的見解の前提は、完全に妥当性を失うわけではないようにみえる――高と饒による「反党連盟」や「党と国家の権力の簒奪の企て」は事実を反映していないとしても。ひるがえって、野心的で無謀で哀れな高崗と、プロアクティブで政治的計算に長けた毛沢東を組み合わせる第三説と第四説の前提も、捨てがたいといわなければならない。もっとも、第三説は、高崗の「陰謀」を発見した際の毛沢東の驚きと彼が受けた衝撃の大きさを想定していない点で問題がある。また第四説は、劉少奇と周恩来を自らのもとに引き付け、忠実ならしめることを毛沢東の主要な目的と想定することで、党の一体性そのものが危機に瀕していることについての主席の重大な危機意識を十分に考慮していない点で問題を含んでいる。

正統的見解に力を与えるのは、毛沢東は切迫した危機感をもって事態の処理に臨んだようにみえることである。一九五四年一月、杭州に滞在する主席と北京にいる劉少奇の間を何度か往復した楊尚昆の日記の次の記述からは、第七期四中全会の前に、毛沢東（および劉少奇、周恩来、鄧小平ら）が会議中に起こりうるあらゆる事態を想定していたことがうかがえる。

「情況は差し迫っているか。三種類の可能な状況がある。

『衝突』〔原文は「衝」――高橋〕

（1）何人かの主要な同志が反抗しないことは保証できる。

（2）参加者が反抗しないよう、事前に手を打っておくのがよい。

（3）彼（高崗）が彭真を攻撃してもかまわない、解決できる。

（4）彼が劉少奇を攻撃し、自分は引っ込み、多くの人を巻き込む（可能性は大きくないが、準備しておく）。そ

うなれば会期を長引かせ、小さな会議を開き、主席に報告する。いざというときには主席が北京に戻り処理する。極力この種の可能性は避ける」[115]。

劉少奇は、同会議で行う予定の彼の包括的な自己批判――それはまさに毛沢東によって指示されたものであった――の原稿について、他の主要な指導者たちと慎重に検討を重ねた。というのも、自己批判の仕方によっては、彼に批判的な人々――もちろん高崗を含めて――の攻撃の呼び水となり、会議が混乱をきたし収拾がつかなくなる――すでに前年の中央組織会議の際に経験済みであった――ことを恐れたためであった。劉少奇の毛沢東宛の手紙によれば、「この自己批判は、すでに周恩来、陳雲、彭徳懐、鄧小平の各同志の閲読審査と修正を経ました。そのうちのいくつかの部分は自己批判ではなく、弁明になっております。というのも、**ある者がこれらの部分に対して激烈な攻撃を行ったことがあり**、少し弁明することが必要であるように思われるからです。**しかし、このようにしても、やはり攻撃を招くことがあるでしょう**。もし攻撃されたら、攻撃されるままにしておいても、とくに問題はないように思われます。いかがでしょう。主席の指示をお願いします」[116]。明らかに、来るべき中央委員会総会が波乱含みであることを毛沢東と彼の側近たちは予想し、ありうる事態に備えていたのであった。その備えは、周恩来の手筈で羅栄桓――高崗の古い戦友であった――など一部の軍指導者の住居周辺の警護（あるいは監視であろうか）を手厚くし、さらには一部の参加者にピストルを持たせて会議に出席させることにまで及んだ[117]。

かくも緊張した雰囲気は、「震度八の地震」に見舞われたと表現するにふさわしい。だが、客観的な状況からみて、大袈裟すぎるようにもみえる。林彪はすでに高崗の企てに参加しない旨態度を明らかにしていた。文化大革命の期間中、高崗とのかつての結託を批判された彭徳懐もまた、すでにみたように一九五三年一二月中旬、高崗の問題に関する毛沢東の相談相手の一人であった。さらに、薄一波の記すところ、高崗が好んで会った一人で

ある広東の実力者、陶鋳（中南局第一書記）もまた、財経会議の期間中、大胆に薄を攻撃してほしいとの高の要請に応えなかった。[118] すると、いったい誰が高崗に味方して第七期四中全会を好機とみてクーデターを仕掛けようと目論んでいたのか、少なくともその潜在的な危険性があったというのか。この点は依然として不明であるといわなければならない。

とはいえ、高崗の排除を決定した後、その具体的な方法を考えるにあたり、高崗と饒漱石の二人に攻撃を集中することによって、言い換えれば、彼らを贖罪の山羊とすることによって、党内の団結を回復するという方法が採用されたという第三説の主張は妥当であるように思われる。ここで発揮された毛沢東の政治的手腕は見事なものであった。この「ショック療法」は、次の三つの側面から成り立っていた。第一に、「白区の党」の代表者と目される劉少奇が、「ソビエト区の党」の代表者である毛沢東と緊密に協力しながら、党の分裂を目論む「陰謀家」を摘発する。第二に、高崗と饒漱石をスケープゴートとし、彼らに党の団結を乱した一切の責任を負わせる。そして第三に、高と饒に取り込まれそうになった人々を、自己批判を通じて免罪する。おそらく、このようにして毛沢東は高崗事件を奇貨として、予期しなかった形で、劇的に党内団結を回復することに成功したのであった。その意味で、毛沢東の態度はリアクティブであると同時にプロアクティブであったように思われるのである。

ところで第二説の妥当性はどうであろうか。この説はなるほどもっともらしいが、近年利用可能となった資料に照らしてみれば、排除しうる仮説であるように思われる。たしかに趙家梁も、毛沢東にとって高崗が危険に思われた理由のひとつとして、高崗がスターリンと金日成の支持を受けていたことをあげている。[119] だが、趙は主席がそのような理由から高崗を恐れていた証拠を何ら示してはいない。実際には、毛沢東が、高崗とソ連指導者（および北朝鮮指導者）との独自のつながりを深く懸念していたことを示唆する具体的な証拠は、現在利用可能ないかなる資料にも見出すことができない。高崗は一九五三年一一月中旬になっても、金日成と会見し、北朝鮮に

無償援助を与えており、外交上の役割を担い続けていたのである。[120]

高崗は東北地方の建設において彼の「独立王国」を築いたと目された。したがって、高崗事件の後始末は、この「独立王国」の解体なしで済ませるわけにはいかなかった。その目的で、第七期四中全会後の一九五四年三月下旬から四月下旬にかけて、瀋陽において東北地区党高級幹部会議が開催された。党中央から周恩来と羅瑞卿が派遣され、一ヵ月もの長きにわたって高崗の誤りが逐一検討されたのち、採択された長文の決議のなかに、われわれは高崗の対外関係に関する誤りとして、わずかに「高崗はまた中ソおよび中朝関係において、是非を誤り、中ソおよび中朝の団結に不利な陰謀活動を行った」という一文を見出すことができるだけである。[121] 文化大革命の時期に書かれた『高崗罪悪史』は、高が駐ソ大使の張聡天を通じて外国と通じ、しばしばソ連指導者に勝手に手紙を書き、わが党内には親ソ派と反ソ派がおり、自分は親ソ派であるなどといい、中ソ関係を破壊しようと企んだと述べている。[122] だが、ソ連の手先に成り下がったという極端な非難がなされても不思議ではない文化大革命の時期にもかかわらず、中ソ関係を破壊しようとしたとの批判しかなされていないことは、かえって高崗とソ連との結託が、具体的な証拠に乏しいことを示唆している。同時期に書かれた高崗を非難する別のパンフレットもまた、彼が「中ソ関係を挑発した」と記しているのみである。[123]

一方、高崗自身もソ連指導者とのつながりを自分の政治的資産としてアピールすることはなかった（もしそのように振舞えば、中国共産党内部において不利な立場に置かれたであろうから、これは当然のことと思われる）。したがって、仮に主席が高崗とソ連との独自のつながりについていくらか懸念していたとしても、それが主要な理由となって、高崗の粛清に導いたと考えることはむずかしい。

したがって、筆者の思い描く高崗事件のストーリーの概要、および彼の粛清の理由に関する仮説はこうである。毛沢東は、一九五三年秋まで高崗を高く評価していた。同年夏の財経会議における高崗の薄一波に対する攻撃に

ついて、主席はそれが自身の意図に沿ったものだとしても、いくらかやりすぎだと感じたかもしれない。また、「名簿事件」に高崗が関係していたことは、毛にとって懸念材料となった。だが、東北の実力者に対する信頼は、彼に対する懸念を埋め合わせて余りあるものであった。それは、新民主主義にこだわらず先を急ごうとする毛沢東の観点に高崗が寄り添っていたから、あるいは毛の観点を高が先取りしていたからに他ならなかった。

ところで、財経会議の途中から、毛沢東にとってひとつの大きな問題が浮上する。それは党内の団結に関わっていた。団結の危機は、毛が「過渡期の総路線」を提起し、本来党内の慎重な議論を経なければならない建国の綱領に関する根本的な修正を強引に行ったことによって作り出された。主席が「批薄射劉」を演出し、新民主主義を継続しようとする人々に打撃を与えようと試みたことによって、財経会議は第一次五ヵ年計画の策定に関わる財政と経済の問題を議論する場となるより、党内闘争の場と化した。とはいえ、薄一波と劉少奇の自己批判によって、表面的には団結が取り繕われた。

団結は一九五三年秋の中央組織会議の場で打ち固められるはずであった。だが、またしても会議は批判の応酬の場となり、手が付けられなくなった。これはたんに人民共和国が進むべき道をめぐる闘争ではなかった。「白区の党」と「ソビエト区の党」という、党を二つに引き裂いてしまいかねない危険な範疇が勢いづこうとしていた。もし後者が、路線の問題にかこつけて一方的に前者を駆除してしまったら、党にとっては大きな災難となったに違いない。本格的な経済建設を控えたこの時期に、ブルジョアジーや農民たちをも巻き込みかねない大きな政治闘争は避けなければならなかった。毛沢東の不安は膨らみつつあった。

そのようなとき、同年一二月中旬、陳雲（と鄧小平）から驚くべき報せが――誇張された情報が――届けられた。高崗がクーデターを企んでいる可能性があるという報せである。あるいは、毛沢東が自身で同様の可能性に気づいていたときに、陳雲の情報は主席に最後の確信を与えたのかもしれなかった。あるいは、主席とこの党内

指折りの経済専門家が共謀して、そのような結論とすることで合意したのかもしれない。いずれの可能性が真実に近いかは不明である。いずれにせよ、このとき毛沢東（と陳雲、鄧小平）は、ひとつの計略を思い浮かべた。それは高崗と饒漱石に党分裂の危機の責任を負わせ、彼らに加担しそうになった人々を、彼らが高・饒と絶縁することと引き換えに放免することによって、党内団結の局面を作り出す――これこそが根本的動機である――という計略である。しかも、この企ては、主席と劉少奇が手を取り合って進めるのである。これによって、「白区の党」と「ソビエト区の党」の間の危険な溝は埋められるであろう。このような考えに基づき、「党内団結の強化に関する決議」とそれを指導者たちに承認させるための第七期四中全会が急いで準備された。

毛沢東がどこまで本気で高崗によるクーデターの可能性を信じていたかは不明である。本気で信じていたとすれば、主席の反応は基本的にリアクティブなものだったといいうる（だが、そうであるとしたら、このクーデターの首謀者に対して、政治生命を完全に抹殺せず、西北で仕事を続けさせようとしたのは、どういうわけだろうか）。本気で信じていなかったとすれば、彼の反応は、本来とくに排除する必要もなかった人物をあえて粛清したという意味で、より陰謀の側に近づくプロアクティブなものであった（しかし、本気で信じていなかったとすれば、第七期四中全会に際しての、万が一の事態に対する毛沢東の慎重な備えをどう説明できるだろうか）。筆者の推測は、毛沢東が高崗によるクーデターの可能性について半ば信じていたが、半ば信じていなかったというものである。たとえそうであっても、彼に重大な責任を負わせ、党内に凝集力を取り戻すことが肝要であった。

こうして、筆者の仮説は、野心的で無謀だが哀れで不運な高崗と、リアクティブであると同時にプロアクティブで思慮深く幸運な毛沢東を組み合わせるものである。高崗が「哀れ」であるというのは、彼が少なくとも主観的には毛沢東の意図に忠実であったのに、毛によって突然政治生命を絶たれたからである。「不運」の意味は最終節で説明しようと思う。一方、「幸運な」毛沢東とは、いわば危機を逆利用して党内分裂の危機を切り抜ける

ことに成功したことを指す。

ただし、一九五三年一二月中旬に高崗の「運命が決した」かどうかについては議論の余地が残るであろう。林蘊暉の最新の研究書は、そこに「陝西王」の政治生命の終焉をみていない。というのは、毛沢東が第七期四中全会を一種の「平和会議」とし、同会議で高崗と饒漱石に対する名指しを避けながら、彼らに「難関を突破させる」ことを目指したという明白な事実があるからである。どうみても、主席は高崗を棍棒の一撃で抹殺するつもりはなかった。そして毛は、高崗がどうにか中央委員会総会の試練に耐えた後、彼に何らかの仕事を与えるつもりであった。クーデターを目論み、「震度八の地震」を起こした人物に対して、あまりにも寛容な措置であるようにみえる。

だが、その後、中央書記処が高崗の第七期四中全会における自己批判を不十分だとし、後の座談会の総括報告において、周恩来が高崗を「資産階級の党内における代理人」と断定しても、主席は反対しなかった。[124] それどころか、周恩来の報告要綱に、高崗の罪状をいっそう深刻なものにする言葉を付け加えたのであった。高崗は自分がベリヤと同列に語られはじめたことに気づいていた。彼は座談会において、「あなたたちの見方に従えば、私はベリヤか、それとも張国燾か」と述べた。[125] もし高崗を「中国のベリヤ」として扱い、連日、一方的な非難を浴びせるばかりの過酷な環境に置けば、彼を遅かれ早かれ自殺に追い込む――結局、ベリヤは処刑されたのだった――ことは十分予見可能ではなかったか。だが、毛沢東は座談会を穏やかな性質のものとするよう劉少奇と周恩来にとくに命じることはなかった。

したがって、毛沢東の態度は分裂しているように思われる。高崗の扱いをめぐって、あたかも態度の異なる二人の主席が存在したかのようである。一人の主席は、過ちを犯した高に対してこのうえない寛容を示し、彼に「難関を突破」させた後は、地方で工作を続けさせようとする――そもそも彼がそれほど重大な過ちを犯したと

は考えていないようにみえる。だが、もう一人の主席は高がクーデターを企んだとみなし、ベリヤ事件の論理を適用して、彼が政治生命を絶たれても仕方がないと考える。事件が明るみに出たときだけではなかった。この最高指導者の態度は、数年後においても引き裂かれたままであった。一九五九年八月一六日、廬山会議として知られる第八期八中全会における毛沢東の講話はそれを象徴していた。彼の秘書、李鋭によって克明に記録されたその講話（未公表）において、主席は高崗に対して同情たっぷりに次のように述べた。「高崗のことは、私に責任がある。遅れてしまったのだ。私は本来、習仲勲〔中央人民政府政務院秘書長〕と話をするつもりで彼と約束した。目的は習と語ることだった。というのも、その当時、高崗は陝北に行きたがっており、**われわれも彼の党籍をそのままにし、中央委員でもあり続けるようにして**彼を延安に帰して工作させようと思っていた。本人もそう望んでいた。しかし、一歩遅かった。話をするのが間に合わなかった。彼が自殺し、何とこんな結末となってしまったことは、私も残念に思っている」[126]。驚くべき発言ではないか。クーデターの首謀者にして「中国のベリヤ」、「資産階級の党内における代理人」である人物から党籍を剝奪することもなく、中央委員にとどめておくことなどありえようか。ここにわれわれは、寛容の化身のような毛沢東を見出す。だが、同日、彼が書いた文章は、いささか調子が異なっていた。その文章は、過ちを犯した同志に対して「病を治して人を救う」方針で接することを主張しているものの、誤りを犯したすべての同志は「陳独秀、羅章竜、張国燾、高崗の類のごく少数のものを除けば」必ず変わることができるであろうと述べ、悔い改めることができる人々から高崗を除外していたのである[127]。その意味で、毛沢東の高崗に対する態度、あるいは高をめぐる思考の道筋はなおも不明であるといわなければならない。

あるいは次のように考えることもできるであろう。一九五三年一二月中旬に高崗の行為が重大な危険性をはらんでいることが明らかになった際、あるいはともかくもそのような結論に至った際、毛沢東は高崗をどのように

扱うべきか決めかねていた。それは主席自らが集めた、そして他の指導者たちから提供された高崗の活動に関する情報に対して、彼自身が半信半疑であったことによるであろう。これまで毛が高く評価してきた「陝北王」がそれほどの罪を犯したというのか。彼は深く困惑していたに違いない。この困惑は、高崗が、主席との私的会話のなかで告げられた劉少奇に対する不満をいいふらして党内不和を煽ったことによってさらに深められた。もっとも肝心なことは、高崗の行為によっていまや分裂の危機に直面した党に凝集力を取り戻すことであった。そのためには、来るべき第七期四中全会は、すべてのものに自己批判をさせるが、誰にも個人攻撃を許さない「平和会議」とするのがよいであろう。そうはいっても、高崗の罪を暴き、党内分裂の危機の責任を一身に背負わせなければならなかった。だが、いかなる罪で？　毛沢東は決めあぐねていた。

奇しくも、一九五三年一二月二三日、ソ連でベリヤが処刑され、間もなく毛沢東はその事件の顚末をユージン大使から告げられた。その際、主席はベリヤ摘発の論理に合わせて高崗事件を処理することに思い至ったのであった。つまり、高崗が犯した具体的犯罪――それは毛にもよく理解できなかった――から出発して彼の処分に至るのではなく、ベリヤ摘発の論理から出発してその鋳型に高崗を当てはめようとしたのである。やがて、この論理は独自の力を持ち始め、高崗の罪は劉少奇や周恩来によってエスカレートさせられていった。そして最終的には、総理によって「資産階級の党内における代理人」という恐るべき罪が彼に宣告された。だが、こうした「罪のエスカレーション」を毛沢東は制止しようとしなかった。その間、忌まわしいレッテルを貼られた高崗は心理的に追い詰められ、ついに自殺へと至った。この自殺は、毛沢東にとって、一方で痛ましいものであったが、他方で「中国のベリヤ」にふさわしい最期でもあったのである。

おわりに

最後に高崗事件を再び当時の歴史的文脈のなかに置き直し、その意義を検討してみようと思う。一九五三年当時の中国においては、政治的にみて、少なくとも以下の四つの重要な過程が重なり合いながら進行していた。

第一は、社会主義への移行に関して、党内で次第に見解の違いが明瞭となっていたことである。見解の分岐とは、次のような比喩を使って理解することが可能である。マルクスはかつて資本主義の社会の子宮のなかで成長する社会主義の胎児について語った。中国のように、母体としての資本主義がはなはだ弱々しく、したがって胎児もまた十分に成長していない段階においても、権力が介入し、赤ん坊を取り上げるべきであろうか。この場合、経済的・文化的実体という社会主義の内容が得られるより先に、ともかくも社会主義の形を作り出すことになるであろう。それとも、史的唯物論に忠実に、まずは母体をしっかりと成長させ、それによって胎児の十分な成熟を待って「自然な」出産を実現させるべきであろうか。当人たちがマルクスを理解していたかどうかはともかく、劉少奇は後者の立場に立ち、毛沢東は前者の立場に立っていたといいうる。

劉は、一九四九年秋の中華人民共和国建国直前に人民政治協商会議によって採択された臨時憲法の性格を持つ「共同綱領」に記された新民主主義という枠組みに忠実であろうとした。その枠組みに従えば、現在の中国は労働者階級が指導するとはいえ、資本家を保護し、富農を保護することによって、資本主義を育成すべき段階にあるのであった。だが、先を急ごうとする衝動に突き動かされた毛の考えでは、それではいつまでも資本主義の段階にとどまってしまうのである。より正確にいえば、主席は新民主主義の発展を資本主義の発展と同一視し、新民主主義を放棄して即座に社会主義に突き進むことを主張したのであった。

この問題は、朝鮮戦争の終結が近づくに伴い、国内建設により力を集中できる環境が生まれるにつれ、また

「三反」、「五反」運動を通じてブルジョアジーが事実上淘汰されるにつれ、[128]先鋭な形で中国の指導者たちに突き付けられた。意見の分岐は、毛沢東が一九五三年六月一五日に「過渡期の総路線」に関する演説を行い、社会主義改造を建国直後から開始することは、すでに建国前の第七期二中全会で決まっていたことだと強弁することでは解消されなかった。表立って毛沢東に反論する人々はいなかったとはいえ、この突然で強引な裁定に対する党内の不満が大きかったことは十分に想像できる。これはたんに党内だけでなく、社会からも大きな反発を引き起こしかねない裁定であった。農民たちは、土地改革を通じて土地を分配されたばかりであったから、集団化など思いもよらなかったであろう。新しい権力との長期共存を約束されていた商工業者にとっても、これは公約違反に他ならなかった。毛沢東が一九五三年の財経会議において当初、薄一波を厳しく批判していたものの、最後には彼に対する融和的な姿勢をみせたのは、これ以上特定の人々を批判し続ければ、党内の潜在的な分裂にとどまっていたものが、党を超えた手に負えない社会の分裂にまで至る恐れがあると彼が判断したためであろう。

高崗は一貫して毛沢東の側に立っていた。というより、むしろ毛沢東よりも急進的な姿勢を示していた。あまり多いとはいえない彼の著作のひとつにおいて、高は一九五二年の段階で、私的に営まれる資本主義に対する党の基本政策が「節制」であるべきこと、また党が農村で社会主義を宣伝し、農民を指導して合作社の道に引き入れることを公然と主張していた。[129]それゆえ、高崗には劉少奇と対立する理由があり、毛沢東には高崗を持ち上げる理由があった。そして、高崗もそのような主席の態度を知っていたに違いない。したがって、彼にとって劉少奇を引きずり下ろすことは、毛沢東の意向に沿ったものであった。だが、高には繊細な政治的手腕が欠けていたのである。

第二は、一九五三年にすでに六〇歳になっていた毛沢東が、彼の後継者を選ぶ段階に入っていたということである（後継者の問題は、次に述べる党と国家の指導体制の再編と不可分であった）。主席は一九五三年頃から「中央を

第一線と第二線に分ける、自分は第二線に退く」と主張し始めていた。同年三月五日のスターリンの死去は、偉大なる指導者の後継者をいかに選ぶべきかという問題を否応なく中国の指導者たちにも突き付けた。この問題の浮上は、高崗を活動的にさせた。彼の確信に基づけば、劉少奇は明らかに後継者として適格性を欠いており、主席もまた内心ではそう考えているに違いなかった。たしかに毛は同年春に、劉少奇がほしいままに党中央の名義をもって文書を発していることを厳しく叱責していた。[130] さらにその一ヵ月後には、名指しは避けたものの、明らかに劉少奇を念頭に置いて、「革命の性質が変化したことがわからず、引き続き彼らの『新民主主義』をやっている」人々を非難したのである。[131] したがって、もし後継者として不適格なこの人物を引きずり降ろすことができれば、自分は毛沢東に気に入られているのだから、権力の頂点に立つことができるかもしれない――そのように考えるほど高崗が野心的であったとは筆者には思われない。[132] だが、ともかく劉少奇を無力化するために彼は奔走したのである。それは、実際には熟慮された「陰謀」とは程遠かった。むしろ手あたり次第、毛沢東との私的な会話のなかで主席から聞いた劉少奇に対する不満をいいふらしながら、自らの考えに対する賛同者を集めたというに近かったのである。

第三は、党と国家の指導体制の再編成が始まっていたことである。これには二つの側面があった。ひとつは、新中国成立直後にいったんは地域的に分散した権力を、中央に集権化する過程が進行していたことである。その過程で、地方に根を張っていた実力者たちが北京に異動させられ、彼らのもともとの地盤から切り離されることとなった。高崗は東北から、そして饒漱石は華東地区から引きはがされて北京に連れてこられた。これは毛沢東にとっては一石二鳥、あるいは一石三鳥であった。というのは、東北地方で圧倒的な権力を握るがゆえに「独立王国」を築きかねない高崗を足元において監視できるし、しかも戚本禹が述べるように、劉少奇との政治的均衡をとるための重石にできたからである。[133] さらには、高崗を重視する姿勢を示して、ソ連との関係緊密化を図るこ

ともできたであろう。もうひとつは、工業化と社会主義改造を見据えた党と国家の指導体制の再編成であった。革命戦争をたたかう体制とは異なる指導者と組織が必要とされていた。そして、ここでも東北地方をいち早く工業化の軌道に導くことに成功していた高崗の手腕が注目されていたのである。

そして第四は、工業化および社会主義建設を控えて、ソ連との関係の緊密化が図られていたことである。ソ連の統治モデル、ソ連の技術、ソ連の専門家、いずれをとっても新中国の建設には不可欠だと思われた。したがって、ソ連との良好な関係はどうしても維持しなければならなかった。ところで、モスクワの指導者たちは、彼らが「国際派」と称するところの王明が中国共産党のなかで微妙な立場に置かれていることを知っていた。同じく「国際派」の高崗が権力から遠ざけられるとしたら、それはモスクワにとって危険な兆候だと映ったに違いない。したがって、北京としても高崗を重用しなければならなかった。だが、外国とつながっている――その程度は別として――ように思われた人間が党中央に深く食い込むことは、毛沢東にとって不安材料となったであろう。饒漱石もイギリス、フランスおよびアメリカで活動した経験があり、それもまた毛沢東にとっては懸念事項であったかもしれない。そのような理由から、高崗という人物は、毛沢東にとってはアンビバレントな存在であったかもしれない。すなわち、一方においては、二重の意味で有用な人間として、つまり劉少奇に対する重石として、またソ連との関係を円滑にできるという意味で有用な人間として、しかし他方においては、ソ連の利益を代弁しかねない危険な存在として。

そうであるがゆえに、スターリンが死去した後、モスクワで権力の後継争いが展開されたとき、毛沢東はこのどさくさにまぎれてモスクワとつながる、潜在的に危険な人間を除去する好機が到来したと考えただろうか。これは前述の第二説が採用する観点である。しかし、そのような仮説を支える証拠は一切見出すことができない。おそらく毛沢東にとって、高崗のソ連指導者との関係は不安材料であったであろうが、高のさまざまな有用性は、

彼に関する不安を打ち消して余りあったのである。

このようにみてくると、一九五〇年代初めの中国政治の舞台の変化が、高崗を運命的に舞台の中心に立たせたようにみえる。つまり、ある種の構造的な力が彼を政治の前面に押し出すべく働いたように思われるのである。だが、運命は高崗を高くもち上げ、次の瞬間に地面にたたきつけた。高崗の没落には悲劇の要素が含まれている。高の転落は、彼に対するこのうえない称賛の嵐のなかで準備された。彼は自分が最も信頼していた人々――毛沢東、陳雲、そして林彪――によって突然、破滅に追い込まれた。高崗は、中国にわずかに残る資本主義の息の根を止めようと躍起になったにもかかわらず、「資本主義の党内における代理人」の烙印を押された。さらには、彼が蹴落さなければならないと考えていた劉少奇は、まさに高崗の活動のゆえに毛沢東との関係を修復してしまった（これによって毛と劉の協力関係はさらに一〇年間続くことになった）。

同時に、高崗の没落には偶然の要素も含まれている。もしこの東北の英雄が北京にやって来たとき、彼の執務室が毛沢東の傍でなかったら、主席との私的会話を通じて、彼があれほど劉少奇に対する敵意をふくらませることはなかったかもしれない。また、スターリンが、高崗が北京にやってきた直後に死去しなかったなら、高は党と国家の指導部の再編成の問題に関わることもなかったであろう。

もうひとつ、ベリヤ事件が毛沢東をはじめとする指導者たちの高崗に対する見方に影響を及ぼしたことが重要である。第七期四中全会で採択された「党の団結強化に関する決議」は、すでに引用したように、ベリヤ事件の例を引いて、帝国主義者と反革命分子の党内における代理人の存在を示唆したのであった。

毛沢東は、高崗が帝国主義の手先（あるいは資産階級の代理人）であると本気で信じていたのだろうか。たしかに、ベリヤ事件の後では、高崗の言動がより危険な要素を含んでいるように思われた可能性はある。つまり、ベリヤ事件が毛沢東にとって一種の参照枠となり、高崗の劉少奇に対する攻撃が、たんに党内の紛糾では済まない、

より重大な脅威にみえた可能性である。第七期四中全会の期間中、ユージン大使と面会した周恩来は、同大使に対して「『ベリヤ事件』はわれわれに党の警戒を強める必要性を高度に重視するよう迫った。また、まさにこの事件が、中共中央にかくも厳粛に高崗のセクト活動に関する問題を提起することを促したのである」と語った。[134]

もうひとつの可能性は、高崗が帝国主義の手先であるとは信じられなかったが、ベリヤ事件に着想を得て、高を「中国のベリヤ」に仕立て上げて政治的に除去するという発想が一九五四年一月に芽生えたということである。いずれの可能性がより真実に近いかは不明であるが、明らかに、毛沢東は高崗事件を中国におけるベリヤ事件として処理しようとしたのである。「ソ連の裏切り者」と重ね合わされたという意味においても、高崗は無謀であったが、同時に不運であったようにみえるのである。

だが、高崗の悲劇は、彼一人の破滅にとどまらないさらなる悲劇を用意したともいえる。高崗事件の結果、政治局員に昇格した林彪は、後に党の団結をほしいままに破壊してしまうことになる。そして、「党の団結強化に関する決議」に含まれ、それ以来毛沢東の思考に刻まれたと思われる、帝国主義および復活を企てる打倒された階級が相互に結託し、必ず党内に代理人を探し求めるという恐るべき論理は、やがて文化大革命を支える論理となって、多くの人々を破滅に追いやることとなるのである。

（1）「中国共産党全国代表会議関於高崗、饒漱石反党連盟的決議」（一九五五年三月三一日）、『中共重要歴史文献資料彙編』第六輯（高崗、饒漱石専輯）第一分冊（有関一九五四－一九五五年期間所謂〝高饒反党連盟〟的若干重要歴史文献）、ロサンゼルス、中文出版服務中心、一九九六年、九〇－九二頁。

（2）「中央政治局拡大会議での講話」（一九五六年四月）、東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳』（上）、三一書房、一九七四年、六二頁。

（3）「成都会議での講話」（一九五八年三月一〇日）、同右、二二二頁。
（4）二〇〇四年までの中国における研究状況については、韓鋼著、辻康吾編訳『中国共産党史の論争点』岩波書店、二〇〇八年、三八－四五頁に簡潔な説明がある。
（5）趙家梁、張暁霽『半截墓碑下的往時――高崗在北京』（以下、『高崗在北京』と略す）香港、大風出版社、二〇〇八年、三八九－三九〇頁。
（6）『高崗在北京』、八六頁。
（7）同右、八一頁。
（8）同右、八三頁。
（9）同右、一〇四頁。このエピソードについては、中共中央文献研究室編『周恩来伝』第二版、第三巻、中央文献出版社、二〇〇八年、および中共中央文献研究室編『周恩来年譜：一九四九－一九七六』上巻、中央文献出版社、一九九七年のいずれにも記載が見当たらない。
（10）『高崗在北京』、一一三頁。ただし、この調査が実際に行われたかどうかは疑わしい。高崗の側近であった張秀山の回想に基づけば、高崗はこの仕事を張に命じ、そして張はやはり高崗の部下である郭峰にこの仕事を回したのであるが、当の郭峰は知らないと証言しているという。戴茂林「『毛沢東譲高崗査劉少奇档案』一説辨析」、『読書文稿』二〇一四年九月、五四－五九頁。
（11）『高崗在北京』、一一七－一一八頁。同年九月二一日に開催された政治局会議において、主席は安子文がこの名簿を作成し、さらに高崗と饒漱石にこの名簿について意見を求めたことは誤りであり、このような行為が中央の同志たちの団結に影響を及ぼす可能性があると批判した。中共中央文献研究室編『毛沢東年譜：一九四九－一九七六』（以下、『毛沢東年譜』と略す）第二巻、中央文献出版社、二〇一三年、一六九頁。
（12）『高崗在北京』、一二〇－一二一頁。
（13）同右、八七－八八頁。
（14）同右、四三頁。
（15）中共中央文献研究室編『劉少奇伝』（下）、中央文献出版社、二〇〇八年、六七一－六七八頁。

(16) 「列多夫斯基与高崗会談摘録：中共高層的内部矛盾」（一九五二年五月二七日）、沈志華主編『俄羅斯解密档案選編：中蘇関係』第四巻、上海、東方出版中心、二〇一五年、二二四頁。
(17) 『高崗在北京』、七八頁。
(18) 同右、一〇〇－一〇一頁。劉少奇が「公私一律平等納税」を支持していたから、毛の批判の矛先は劉にも向けられていたと解釈することが可能である。
(19) 例えば、薄一波『若干重大決策与事件的回顧』中共中央党校出版社、上巻、一九九一年、二四二頁、および中共中央文献研究室編『劉少奇年譜：一八九八－一九六九』下巻、中央文献出版社、一九九六年、三一〇頁。
(20) 林蘊暉『重考高崗、饒漱石「反党」事件』香港、中文大学出版社、二〇一七年、七四－七九頁。
(21) 薄一波、前掲書、二四四頁、および戴茂林・趙暁光『高崗伝』陝西人民出版社、二〇一一年、三〇六－三〇七頁。だが、この発言については、前掲『毛沢東年譜』第二巻には記載がない。
(22) 薄一波、前掲書、二四五頁、および『毛沢東年譜』第二巻、一四六－一四七頁。
(23) 『高崗在北京』、一四〇頁、および林蘊暉、前掲書、八〇－八一頁。
(24) 『高崗在北京』、一三六－一三八頁。
(25) ベリヤ事件とその国際的影響に関する簡潔な説明については、例えば、W・レオンハルト著、加藤雅彦訳『スターリン死後』弘文堂、一九六六年、三三－四五頁を参照のこと。
(26) 『高崗伝』、三一〇頁。『高崗伝』の作者によれば、高崗がモスクワに派遣されたのは八月初めであり、八月一一日、モスクワで鞍山製鉄所の再興と同製鉄所に対する技術援助に関する協定を締結した後、帰国したのであった。同右、三一〇頁。だが、もしそうであれば、先に述べた薄一波が語る八月九日の毛沢東による高崗の叱責はなかったか、それとも日付が誤っていることになる。
(27) 『毛沢東年譜』第二巻、一五二頁の記載によれば、その日付は八月一六日である。
(28) 『高崗在北京』、一四一－一四二頁。
(29) 同右、一四二頁。
(30) 薄一波、前掲書、三一四頁。

(31) 舒雲『林彪伝』（下）、Deer Park, NY, 明鏡出版社、二〇一六年、二二一頁。便器に打ち捨てられたこの手紙は、林彪夫人の葉群によって拾い上げられ、つなぎ合わされたという。

(32) 『高崗伝』、三二六頁。

(33) 例えば、前掲『劉少奇年譜：一八九八－一九六九』下巻、三一三頁を参照のこと。

(34) 『高崗在北京』、一五五－一六二頁、および一八三頁。『毛沢東年譜』第二巻、一七六頁の記載によれば、たしかに当日、毛は張と会っている。

(35) 『高崗在北京』、一六五－一六六頁。

(36) 同右、一六七－一六九頁。

(37) 同右、一六九－一七〇頁。また、『劉少奇年譜』下巻、三一三頁も参照のこと。

(38) 『高崗在北京』、一七〇頁、強調は高橋。もしこのように劉少奇が述べたとすれば、中央組織会議の混乱は、それが起こった当時、高崗の画策とは認識されていなかった可能性があるのである。

(39) 中共中央文献研究室編『鄧小平年譜：一九〇四－一九七四』中、中央文献出版社、二〇〇九年、一一四〇－一一四一頁。

(40) 「対劉少奇等在全国組織工作会議領導小組会上的講話稿的批語和修改」（一九五三年一〇月二三日）、中共中央文献研究室編『建国以来毛沢東文稿』第四冊、中央文献出版社、一九九〇年、三七三頁。

(41) 『高崗在北京』、一七〇－一七一頁。

(42) 『高崗伝』、三二六－三三〇頁。

(43) 『高崗在北京』、一四四頁。ただし、高崗夫人の李力群の回想に基づけば、行き先は毛沢東の主張によって決定されたという。前掲『林彪伝』（下）、二二二頁。

(44) 『高崗在北京』、一四四頁。奇妙なことに、この時の毛沢東の「急病」については、『毛沢東年譜』にも、また中共中央文献研究室編『毛沢東伝：一九四九－一九七六』上巻、中央文献出版社、二〇〇三年にも関連する記載が一切見当たらない。

(45) 中共中央文献研究室編『陳雲伝』（二）、中央文献出版社、二〇一五年、八九一頁、および前掲『毛沢東伝』上巻、

二七八－二七九頁。

(46) 当然のように、この問題は中国の歴史家たちにとっても大きな関心事である。だが、いかに考証の努力を行っても、信頼に足る文書や証言は得られないようである。例えば、王祖強、丁亜政「関於一九五三年一〇月高崗杭州之行幾個問題的研究」、『当代中国史研究』第二〇巻第四期（二〇一三年七月）、九〇－九七頁を参照されたい。

(47) このとき秘書の趙家梁は上海に出張中で、高と林の会談には同席しなかった。したがって、彼らが何を語ったか、趙はまったく記していない。『高崗在北京』、一四九頁。

(48) 『林彪伝』（下）、一二二五頁。

(49) 『高崗在北京』、一四七頁。

(50) 同右、一四九－一五三頁。

(51) これは一九五五年三月二八日、党全国代表大会での陳雲の発言である。前掲『陳雲伝』（二）、八九一頁。

(52) 中共中央文献研究室編『鄧小平伝』下巻、中央文献出版社、二〇一四年、九六六頁。

(53) 中共中央文献研究室編『陳雲年譜　修訂本』中巻、中央文献出版社、二〇一五年、二九〇頁。

(54) 楊尚昆『追憶領袖戦友同志』中央文献出版社、二〇〇一年、二九八頁。なお、一二月一三日という日付は、楊尚昆の回想録にはなく、『毛沢東年譜』第二巻、二〇八頁の記載に基づく。

(55) 『高崗伝』、三三二頁、および『高崗在北京』、九四頁、一八四頁。『毛沢東年譜』第二巻、二〇九頁の注記に従えば、会議後、高崗はなおも陳雲および鄧小平をつかまえて、彼らに回り番に賛成するよう迫ったという。

(56) 楊尚昆、前掲書、二九三頁。

(57) 『高崗伝』、三三二頁。

(58) 『毛沢東伝』上巻、二七九頁。同様の記述は、前掲『鄧小平伝』下巻、九六六頁にもみられる。

(59) 中共中央文献研究室編『朱徳年譜：一八八六－一九七六』新編本、下巻、中央文献出版社、二〇一六年、一四六二頁。

(60) 林蘊暉、前掲書、一二四頁。

(61) 『毛沢東年譜』第二巻、二〇九頁。

(62) 同右、二一〇頁。やはりこの毛－劉会談についても、具体的な内容は一切公表されていない。

(63) 『高崗伝』、三二九頁および三三二頁、および『毛沢東年譜』第二巻、二一〇頁。陳雲によれば、この時、林彪は高崗が自殺するかもしれないと述べたという。『陳雲伝』（二）、八九三頁。この場合、自殺とは、たんに悲嘆にくれた人物が自らの命を絶つことを意味しているわけではない。高崗の自殺は党中央に対する抗議の意味をもち、またそれが引き金になって彼を支持する人々が動き出すきっかけになりかねないというのが、林彪が警告したとされる「自殺」の意味であろう。

(64) 『高崗在北京』、一八七頁。『毛沢東年譜』第二巻、二一〇頁において、主席は同日午後四時四〇分に高崗と面談したとされているが、会話の内容についてはまったく触れていない。重大な会話がなされたと考えられるにもかかわらず、この点に関する資料の欠落もまた不可解である。

(65) 『高崗伝』、四七四頁、および『毛沢東伝』上巻、二八一頁。とはいえ、この「二つの司令部」に関する毛沢東の発言は、後の全国党代表会議の結論（一九五五年三月三一日）から引いたもので、一九五三年一二月二四日に主席が本当にこのように発言したかはわからないという林蘊暉の指摘は重要である。林蘊暉、前掲書、一六〇頁。

(66) 『高崗伝』、三三五頁、および『高崗在北京』、九五頁。

(67) 『鄧小平年譜』中巻、一一五一頁。その後、主席は翌年三月一七日、ようやく北京に戻った。『毛沢東年譜』第二巻、二二六頁。

(68) 中共中央文献研究室編『楊尚昆日記』上、中央文献出版社、二〇〇一年、九〇頁。このくだりは、前掲『陳雲年譜　修訂本』中巻には記載が見当たらない。

(69) 楊尚昆、前掲書、二九九頁。だが、このくだりについては、『毛沢東年譜』第二巻には記載がない。

(70) 『高崗在北京』、九五頁。

(71) 『鄧小平年譜』中巻、一一五二頁。

(72) 師哲『在歴史巨人身辺：師哲回憶録』第二版（修訂本）、中央文献出版社、一九九五年、四八九頁。この発言はもちろん、「陝西王」高崗が毛沢東を打倒しようとしていると主席が示唆したものと理解できる。だが、奇妙なことに、主席のこの重要な発言については、『毛沢東年譜』にも『毛沢東伝』にもまったく記載がない。

(73) 「尤金与毛沢東談話紀要：貝利亜事件和王明問題」（一九五四年一月四日）、『俄羅斯解密档案選編：中蘇関係』第四巻、四四八頁。『毛沢東年譜』第二巻、二一四頁の記載によれば、たしかに毛沢東は一月三日と四日の二度、ユージン大使と会っている。だが、いずれの会見にも同席している師哲は四日の会見について何も記しておらず、一方、ユージン大使の三日の会見内容は、上記資料集には収録されていない。

(74) 前掲『楊尚昆日記』上、九三頁。

(75) 同右、九四－九七頁。

(76) 「関於召開七届四中全会的建議」（一九五四年一月七日）、中共中央文献研究室編『毛沢東文集』第六巻、人民出版社、一九九六年、三一八頁。

(77) 『鄧小平伝』下巻、九六七頁。

(78) 『高崗伝』、三三八頁。

(79) 『毛沢東年譜』第二巻、二一九頁。

(80) 『鄧小平伝』下巻、九六七頁。

(81) 『高崗伝』、三三九頁。

(82) 『楊尚昆日記』上、一〇一頁。

(83) 『高崗在北京』、一九八頁。高崗は、第七期四中全会前にすでに自殺をちらつかせていたようである。周恩来が第七期四中全会開催前の二月二日にユージン大使に語ったところ、高崗は陳雲との話のなかで、自分は任弼時（中央政治局員であったが、一九五〇年に死亡した）のところへ行く準備をすると語ったという。「尤金与劉少奇、周恩来談話記録：通報高崗—饒漱石事件」（一九五四年二月二日）、『俄羅斯解密档案選編：中蘇関係』第五巻、一六頁。

(84) 「関於増強党的団結的決議」（一九五四年二月）、中共中央文献研究室編『建国以来劉少奇文稿』第六冊、中央文献出版社、二〇〇八年、九七－一〇三頁。

(85) その全文が『高崗伝』、三四一－三四三頁に収録されている。

(86) そのテクストは、『高崗伝』、三四三－三四五頁に抄録されている。

(87) 「我的自我批評」（一九五四年二月）、『建国以来劉少奇文稿』第六冊、七八－九二頁。

(88) 林蘊暉、前掲書、二〇五頁。
(89) この引用文は、林蘊暉、前掲書、二〇八頁に引用されている張明遠のメモによる。
(90) この時の様子は、現場に居合わせた趙家梁によるきわめて具体的な記述がある。『高崗在北京』、二〇三－二一七頁。
(91) 『高崗伝』、三五八頁。
(92) 『楊尚昆日記』上、一〇六－一〇七頁。
(93) 林蘊暉、前掲書、二〇九頁。
(94) 「対周恩来在高崗問題座談会上的発言提綱的批語和修改」（一九五四年二月二八日）、『建国以来毛沢東文稿』第四冊、四五一－四五二頁。
(95) 『高崗伝』、四七六頁。
(96) 『高崗在北京』、二三六－二四〇頁。
(97) 『高崗伝』、四七七頁。
(98) 「尤金与毛沢東談話記録：高崗事件与党内団結」（一九五四年三月二六日）、『俄羅斯解密档案選編：中蘇関係』第五巻、三九－四〇頁。強調は高橋による。
(99) 例えば、中共中央党史研究室『中国共産党歴史』第二巻、上冊、中共党史出版社、二〇一一年、二九〇－二九五頁、中共中央党史研究室『中国共産党的九十年：社会主義革命和建設時期』、中共党史出版社、二〇一六年、四五二－四五三頁、劉書楷、郭思敏主編『中共党史辨疑』中央文献出版社、二〇〇六年、七六九－七七二頁を参照のこと。また、楊尚昆、前掲書、二八一－三一三頁の記述「回憶高饒事件」は、同事件に関するもっとも詳細な正統的見解といいうる。ただし、正統的見解は一定不変というわけではない。現在の公式の党史、例えば『中国共産党歴史』第二巻および『中国共産党的九十年』には、高崗・饒漱石が反党分裂活動を目論んだと記されているものの、「反党連盟」、「党と国家の権力の簒奪」を企図したとの指摘はもはや見当たらない。
(100) この説を採用するものとして、中嶋嶺雄『中ソ対立と現代』中央公論社、一九七八年、一四五－一九三頁、および Maurice Meisner, *Mao's China: A History of the People's Republic*, revised edition (New York: The Free

Press), 1977, pp. 130–133をあげることができる。

(101) 徳田教之『毛沢東主義の政治力学』慶應通信、一九七七年、一五九頁。

(102) この説を唱える作品としては、ユン・チアン、ジョン・ハリデイ著、土屋京子訳『マオ――誰も知らなかった毛沢東』下、講談社、二〇〇五年、およびフィリップ・ショート著、山形浩生、守岡桜訳『毛沢東――ある人生』下、白水社、二〇一〇年がある。

(103) ショート、前掲書、一一九頁。

(104) 『高崗在北京』、二二八－二二九頁。

(105) 楊尚昆、前掲書、二九四－二九五頁。

(106) 文化大革命の期間に高崗を糾弾する目的で書かれたパンフレットのひとつは、羅瑞卿が全国組織会議の様子について逐一、高崗に報告していたという。だが、これは具体的根拠に基づく主張ではない。首都紅代会北京鉱業学院東方紅（鉄錘）編印『高崗罪悪史』第二集、発行年月日不明（『中共重要歴史文献資料彙編』第六輯（高崗、饒漱石専輯）第一分冊）、一六頁。

(107) 『高崗在北京』、二三〇頁、および楊尚昆、前掲書、二九九頁。この時、主席はいささか激高した様子で、饒漱石は北京にいるのだから、自分で弁解しに来ればよいと高崗を叱りつけたという。とはいえ、日付が不明であるのに、これだけ詳細な毛沢東の発言だけが記録されているのは、いささか奇妙である。

(108) ついでにいえば、饒漱石が七期四中全会で行った自己批判においても、高崗との共謀については一切言及がない。「関於我的錯誤的自我検討」（一九五四年二月九日）、『中共重要歴史文献資料彙編』第六輯（高崗、饒漱石専輯）第一分冊、一八－二四頁。

(109) 「結論」（一九五五年三月三一日）、『毛沢東文集』第六巻、三九七－三九八頁。

(110) 『高崗在北京』、一三二頁。

(111) 文化大革命の時期に、高崗を批判する目的で書かれたパンフレットは、「彭徳懐、高崗、饒漱石反党連盟」の成員として、以下の人々の名前を挙げている。陶鋳、習仲勲、譚震林、羅瑞卿、黄克誠、李立三、賈拓夫、陳丕顕、張秀山、李井泉、陳正人、王鶴寿、張聴天、馬文瑞、胡立教、安志文。前掲、『高崗罪悪史』第二集、一六頁、および

『饒漱石罪悪史』第三集、発行年月日不明（『中共重要歴史文献資料彙編』第六輯（高崗、饒漱石専輯）第一冊）、一二頁。だが、これらはいかなる根拠をもって、以上の人々を反党連盟に加担したとみなすのか、まったく示していない。

(112) 『高崗伝』、三四五頁。

(113) 一九五〇年以来、中央辦公室秘書室で働いていた戚本禹によれば、さらに劉少奇もまた高崗を陥れるために、彼の活動を誇張して毛沢東に伝えたのだった。戚本禹『戚本禹回憶録』上巻、香港、中国文革歴史出版有限公司、二〇一六年、九一頁。戚本禹は一切証拠を示していないが、劉少奇は高崗の絶えざる攻撃にさらされていたのだから、これはまったくありえないというわけではない。

(114) この点については、趙家梁の記述が参考になる。『高崗在北京』、一一五－一一六頁、および一八五頁。

(115) 『楊尚昆日記』上、一〇〇頁。

(116) 「関於七届四中全会籌備等問題給毛沢東的信」（一九五四年一月一六日）、『建国以来劉少奇文稿』第六冊、二五頁。強調は高橋。

(117) 『高崗在北京』、二〇一頁。だが、この点は中共中央文献研究室編『周恩来年譜：一九四九－一九七六』上巻、中央文献出版社、一九九七年にも中共中央文献研究室編『周恩来伝』第三巻、中央文献出版社、一九九八年にも記載が見当たらない。

(118) 薄一波、前掲書、上巻、二四一頁。

(119) 『高崗在北京』、一七九頁。

(120) 同右、九一－九二頁。

(121) 「東北地区党的高級幹部会議関於擁護七期四中全会和討論高崗、饒漱石問題的決議」（一九五四年四月二四日）、戴茂林、李波『中共中央東北局（一九四五－一九五四）』瀋陽、遼寧人民出版社、二〇一七年、三八三－三八八頁。

(122) 前掲、『高崗罪悪史』、一五頁。趙家梁は、高崗自身の回想に基づき、彼がスターリン宛に書いた二通の手紙は、いずれも中央の許可を得たものであったとしている。『高崗在北京』、六二－六三頁。

(123) 首都紅代会北京医学院八一紅衛兵総部『徹底掲開彭、高、饒反党連盟的黒幕』一、一九六七年一月、出版社・発

行地不明、一六頁。

(124) この断罪の仕方には、林蘊暉が明確には述べていないがそうほのめかしているように、いくらか周による高に対する報復の意図が感じられる。林蘊暉、前掲書、二一三－二一五頁。

(125) 「尤金与劉少奇、周恩来談話紀要：通報中共七届四中全会情況」（一九五四年二月一三日）、『俄羅斯解密档案選編：中蘇関係』第五巻、一八頁。

(126) 李鋭『廬山会議実録』増訂本、鄭州、河南人民出版社、一九九五年、三一〇頁。強調は高橋。この言葉を、その約半年前における毛沢東の高崗への言及の仕方と比較してみるのは興味深いことである。そのとき、主席は地方の指導者たちを前にこのように述べた。「高崗・饒漱石の反党集団は、ひどいことをやり、行き過ぎもはなはだしく、×〔ママ、おそらく劉少奇を指すと思われる〕と周恩来に反対して、重点を×〔ママ、やはり劉少奇を指すであろう〕に置き、二つの中心、二つの露店があるといい、彼ら自身の綱領をもち、一部の人を惑わし、一切を否定し、ひとつの点のみを攻め立て、その他の点には触れず、ひとつの点を誇張して全体だといいたてたが、結果的には自らを滅ぼした」（「省・市党委員会の書記会議での講話」（一九五九年二月二日）、前掲『毛沢東思想万歳』（上）、三七四頁）。

(127) 「機関銃と迫撃砲の来歴その他」（一九五八年八月一六日）、同右、四二三頁。

(128) 楊奎松「共産党のブルジョアジー政策の変転」、久保亨編著『一九四九年前後の中国』汲古書院、二〇〇六年、一三二－一三三頁。

(129) 「克服資産階級思想対党的浸蝕、反対党内的右傾思想」（一九五二年一月一〇日）、中国共産党華南分局宣伝部編『幹部学習資料』第四四輯、華南人民出版社、一九五二年二月、二五－三八頁。

(130) 「対劉少奇、楊尚昆破壊規律擅自以中央名義発出文件的批評」（一九五三年五月一九日）、『毛沢東選集』第五巻、人民出版社、一九七七年、八〇頁。

(131) 「批判離開総路線的右傾観点」（一九五三年六月一五日）、同右、八一－八二頁。

(132) 一九五四年三月二六日、毛沢東はユージン大使に対して、自分が杭州で休暇中に、ひとつのデマが飛び交ったと述べている。「私が外出中、彼らは外部に対して私が深刻な健康問題を抱えているというデマを振りまき始めた。ある者は私が肺結核にかかったといい、別の者は私が心臓病を患っているといった。彼らはさらに、私が死んだ後は高

崗が私の職位を継ぐかもしれないとデマを飛ばした」（「尤金与毛沢東談話記録：高崗事件与党内団結」（一九五四年三月二六日）、『俄羅斯解密档案選編：中蘇関係』第五巻、三九頁）。このデマがもし高崗自身によって散布されたのだとしたら、たしかに彼には野心があったといいうる。だが、これは高崗以外の人間によって作られたデマであったかもしれない。

(133) 戚本禹、前掲書、上巻、八八－八九頁。

(134) 「尤金与劉少奇、周恩来談話記録：通報高崗－饒漱石事件」（一九五四年二月二日）、『俄羅斯解密档案選編：中蘇関係』第五巻、一六頁。また、何柞康編訳「毛沢東談高崗事件：来自蘇聯的記録」、『百年潮』二〇〇一年第一二期、二四頁も参照のこと。